

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 天守閣部会(第 19 回)

日時：令和元年 7 月 11 日（木） 10:00～13:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

会 議 次 第

1 開会

2 あいさつ

3 報告

- ・現天守閣解体に係る現状変更許可申請及び名古屋城天守閣整備事業に関する補正予算について[資料-1, 2]

4 議事

- ・第 18 回天守閣部会における主な指摘事項と対応状況について[資料-3]
- ・木材の仕上げについて[資料-4]
- ・飾金物について[資料-5]

5 その他

6 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 天守閣部会（第19回） 名簿

日時：令和元年7月11日（木）10:00～13:00

場所：名古屋能楽堂 会議室

（敬称略）

■ 構成員

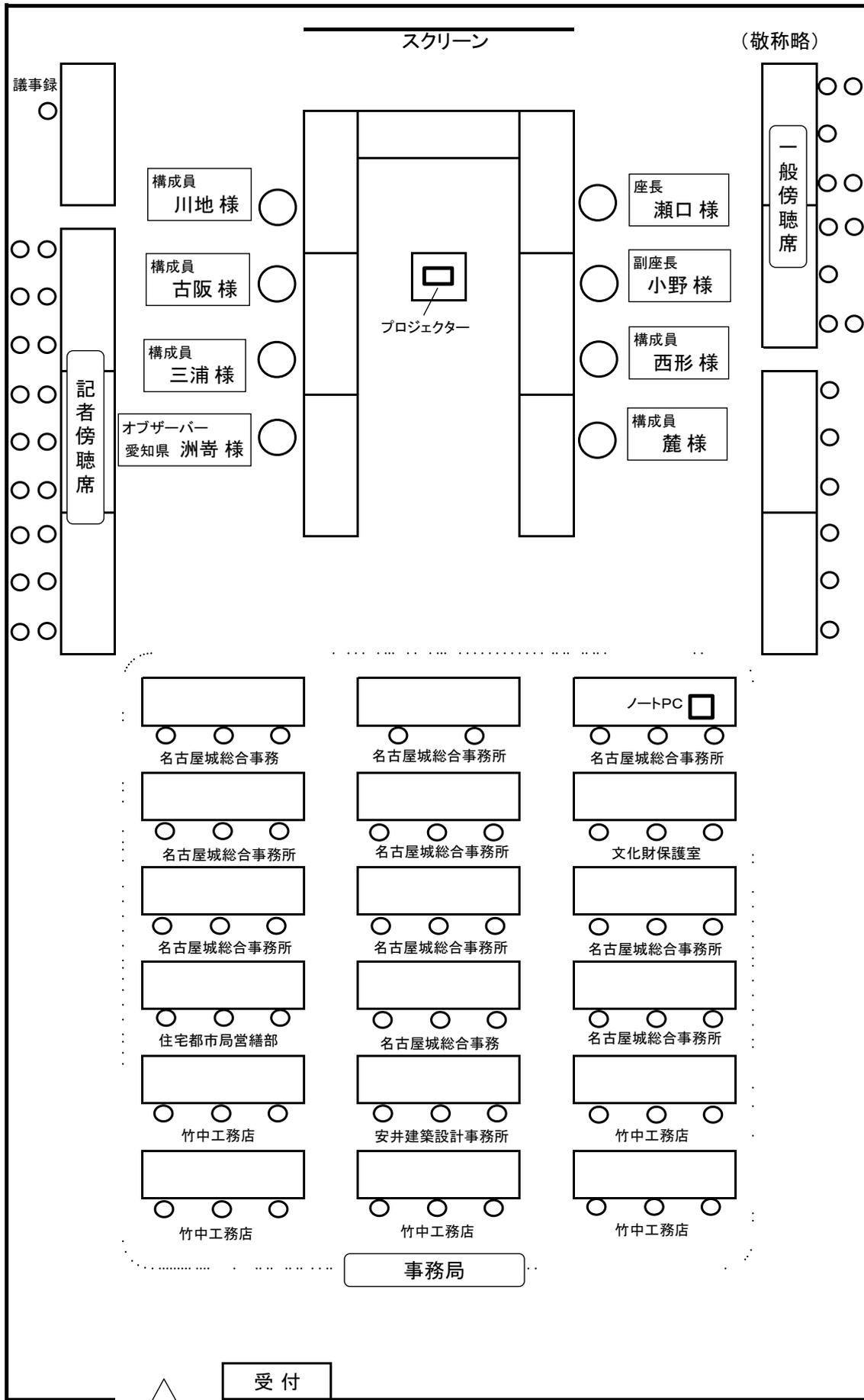
氏名	専門分野	所属等	出欠
小野 徹郎	建築学	名古屋工業大学名誉教授	出席
川地 正数	建築生産	川地建築設計室主宰	出席
瀬口 哲夫	近代建築史、まちづくり	名古屋市立大学名誉教授	出席
西形 達明	地盤工学	関西大学名誉教授	出席
麓 和善	建築史、文化財保存修理	名古屋工業大学大学院教授	出席
古阪 秀三	建築生産	立命館大学客員教授	出席
三浦 正幸	日本建築史、文化財学	広島大学名誉教授	出席

・オブザーバー

氏名	所属等	出欠
洲崎 和宏	愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室室長補佐	出席

座席表

令和元年7月11日(木)  
10:00~  
名古屋能楽堂



6 名古屋城跡の現状変更申請に係る名古屋市への確認事項への回答

(1) 全般的事項

区 分	本市の回答
現状変更申請の経緯について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現天守閣は、耐震性能が極めて低く危険な状態にあり、この状態を放置することはできない</li> <li>・また、今回の解体工事は、石垣に手を加えない工事であるため、既存の現況調査に基づく工学的検討によって、解体工事計画が可能であると判断した</li> </ul>
天守解体・仮設物設置が石垣等に与える影響の有無を判断する方法について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・考古学的な検討については、有識者との間で、データに基づいた建設的な議論が進展していないため、現時点での現況調査の評価に基づいて、工学的な検討を行った</li> <li>・今回の現天守閣解体工事は、直接石垣に触れない工事であるため、既存の現況調査成果に基づいた主に工学的検討によって影響を評価し、解体工事の計画が可能であると判断した</li> <li>・引き続き調査成果の分析を行い、考古学的な検討について、有識者との合意形成に努める</li> </ul>

(2) 個別事項

区 分	本市の回答
現天守を解体する理由、沿革について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現天守閣は市民の機運の高まりによって再建された、戦後復興の象徴と言えるものであるが、SRC造であり、近世城郭の天守を体感することができない。耐震補強をすることで、現天守閣の価値を維持することができる。しかし同時に、近世城郭の天守閣を体感することができない状態が継続する。一方、名古屋城においては、昭和実測図などの記録に基づき、史実に忠実に天守閣の木造復元ができ、それにより、近世城郭の姿を実感することができる。</li> <li>・耐震改修と木造復元を比較したとき、近世城郭の本質的価値の理解の促進という点で木造復元に優位性があるため、本市は、天守閣を木造復元する方針としている</li> </ul>

区 分	本市の回答
<p>現天守解体の具体的な工事内容、具体的な工法・工程等について、及び、現天守の解体・除却工事が文化財である石垣等に影響を与えない工法であり、その保存が確実に図られることについて</p> <p>&lt;A. 仮設物設置の影響について&gt;</p> <p>① 内堀及び御深井丸側石垣の発掘等調査について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和元年5月28日に行われた石垣部会において、内堀内の現況把握（堀底及び内堀外側石垣根石）のための調査について諮り、その実施について合意を得ている。7月以降、別途現状変更許可が得られ次第、調査を行う計画である。また、この調査結果に応じ、必要な対応をとることとしている</li> </ul>
<p>石垣等保全の具体の方針について、及び、石垣等詳細調査の具体的な手順・方法等（石垣調査計画）について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天守台石垣の保存方針について、現天守閣解体終了（2020年8月予定）までに、より具体的な方針を策定する予定である</li> </ul>
<p>特別史跡名古屋城跡に関する事業実施体制について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成31年度、名古屋城の文化財について総合的な調査研究を進めるため、調査研究センターを設置した。学芸職は、併任も含め11名（内1名欠員）、嘱託4名である。その中で埋蔵文化財担当職員は、副所長、主査（併任）、学芸員5名（内1名欠員）、嘱託2名である（令和元年6月現在）</li> <li>令和2年度に向けて、欠員の補充を行うとともに、増員も視野に入れた体制の充実を目指している。特に、若い職員が多いため、職員のスキルアップが体制の充実にとって重要であると考えている</li> </ul>

(令和元年6月21日 市政記者クラブ説明資料)  
令和元年6月24日 経済水道委員会資料

## 市長コメント

先ほど、文化財保護室の担当者から「引き続き第三専門調査会において審議する必要があるため、本日の文化審議会において議題とならなかった。」ことを電話で確認した旨の報告がありましたのでお知らせいたします。

現時点において許可、不許可の結論が出ているわけではありませんが、第三専門調査会で継続審議となり、文化庁からは、今後の見通しはお示しできないが、丁寧かつ速やかに結論を得たい旨の発言をいただいております。

本日の文化審議会で答申がいただけなかった以上、解体工事の着手に、さらなる遅れが生じますので、今後は工期の見直しを含め、天守閣木造復元の実現に向け、竹中工務店、文化庁、地元の有識者と協議を進めてまいりたいと思います。

あくまでも、本事業は史実に忠実に天守を木造で復元することに大きな意義があり市民との約束でもあるため、その目的を達成するために最善の道を選択していきたいと考えております。

## 木造復元天守閣の竣工期限に関する市長コメント

天守閣木造復元の2022年12月の竣工は、極めて厳しいと認識しているが、市民からの期待も大きく、文化庁からは丁寧かつ速やかに結論を得たい旨の発言もいただいております、私としては、あきらめていない。

なお、名古屋城天守閣整備事業に関する基本協定書第13条（事業期間の遵守）第6項には、優先交渉権者は、前項の場合において、自らの努力のみでは合理的に事業期間又は天守閣の完成期限を遵守することができない場合、発注者と協議する。との記載があると認識している。

市長コメント

名古屋城の現天守閣の解体に係る現状変更許可につきまして、去る6月21日の文化審議会の答申は得られておりませんが、第三専門調査会での継続審議となっております。

文化庁からは、できるだけ速やかに結論を得たい旨の発言をいただき、臨時の第三専門調査会の開催についても日程調整を行っていただいていると伺っております。また、今定例会における委員会での議論を重く受け止め、今後、竹中工務店、文化庁、地元の有識者と協議を進め、改めて再度、ご提案してまいりたいと考えておりますので、一旦、延期させていただく趣旨で、議案を取り下げさせていただきたいと存じます。

■特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（第18回天守閣部会）における主な指摘事項と対応

資料-3

発言者	該当章	該当頁	主な指摘事項	対応
瀬口	資料1 (石垣)	1-013	・表5で、「変状度」と「危険度」の評価の関係性がよくわからない	表5に示した「変状度」は、天守台石垣の変形度（石垣の破損・劣化状況）という意味で、一方、「危険度」は、崩落時に想定される被害の程度（利用上の危険）、来場者にとっての危険の度合い、という意味で使用しました。しかしながら、「危険度」という用語は、石垣の変状の度合いを指す場合にも用いられるなど、より幅広く用いられるため、ご指摘の通り、わかり難くなっております。今後用語を再検討してまいります。
川地 瀬口	資料3 (照明計画)		・照明計画は外光の影響も考慮し、季節ごとの日照と照度のシミュレーションを行い、調光パターンなどを検討してほしい ・見学者が多いと影になって暗くなったりしないように検討すること。	引き続き検討し、改めてご報告します。
麓 三浦	資料3 (照明計画)	3-003	・パースに描かれているように、1階部分に、地階と同じ井戸桁がるのかどうか疑問。 ・地階と1階では井戸周りがある流しは異なっていたはず。古写真の1階の部分のところで、実測図で1階のところの傷等を調べていただきたい。	引き続き検証し、改めてご報告します。
瀬口	資料3 (照明計画)		・案内板や展示物をなるべく設置しない内部環境の計画としてほしい。	運営計画の検討がまとまった時点で、改めてご報告します。
川地	資料4 (建具)	4-004～ 4-007	・復元案としてクスノキの採用の可否について検討してほしい	引き続き検証し、改めてご報告します。
麓	資料4 (建具)	4-013～ 4-015	・窓の水抜と敷鉄で、復元した時に、敷鉄の下が腐りにくいようなことを考えて設計してほしい。	引き続き検証し、改めてご報告します。

## 名古屋城天守閣整備事業

平成31年7月11日

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議  
[ 第19回 天守閣部会 ]

資料-4：木材の仕上げについて

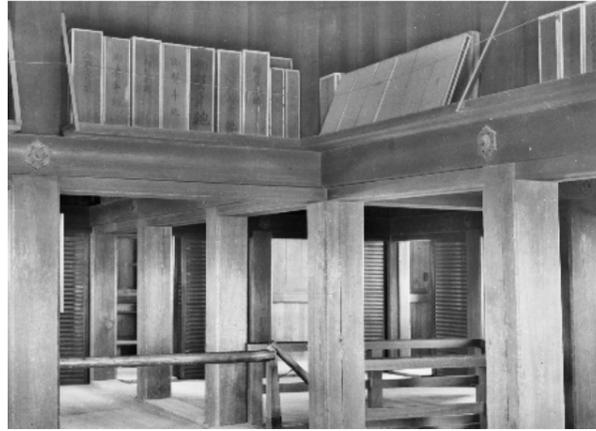
資料-5：飾金具・鬼板について

## 1. 史料による天守の木部の仕上げについて

※『ガラス乾板写真』と『大天守地階の御金蔵の間仕切りの壁板とされている部材（徳川林政史研究所所蔵）』以外に、往時の木の仕上げを推定できる史料は確認されていない。

## 1) 『ガラス乾板写真』による木部の仕上げ ※第3回天守閣部会資料引用

ガラス乾板写真に写る柱や梁、長押や壁板など見え掛り部の材面においては目立った凹凸のある加工痕跡は確認できないため、加工された面が平滑に仕上がっていた状況であることが推測される。



平滑に仕上がった柱・長押・壁板  
『天守閣五階内長押上(焼失)』を加工



平滑に仕上がった繫丸太梁・長押・壁板  
『天守閣三階内南入側(焼失)東側』を加工



平滑に仕上がった柱・繫丸太梁・長押・壁板  
『天守閣一階内西入側(焼失)』を加工

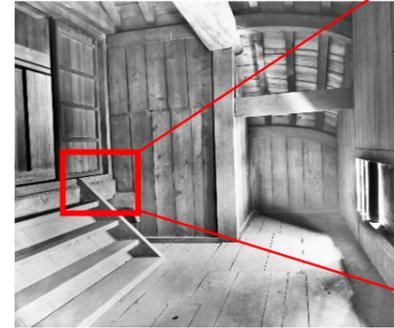
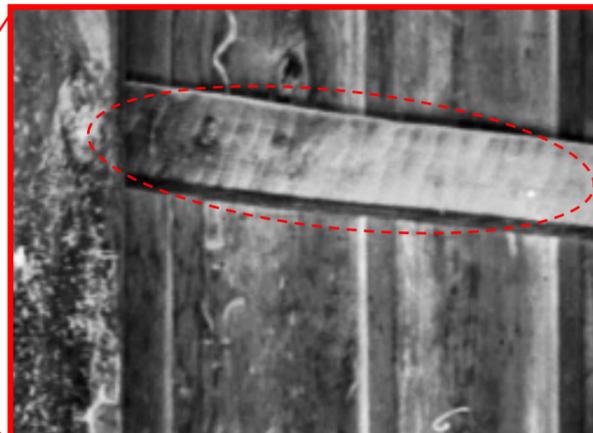


平滑に仕上がった柱・繫丸太梁・長押・壁板  
『小天守閣地階(焼失)東南側』を加工

加工された面で凹凸が大きく、表面の状態を推測できる箇所は、鉦（チョウナ）により加工されたと推測される加工痕跡のある小天守地階の蔵内部の壁胴縁と大天守四階西側の千鳥破風内の丸太梁の一部である。



鉦により加工された壁胴縁  
『小天守閣地階(焼失)東南側』を加工



鉦により加工されたとと思われる丸太梁の一部分  
『天守閣四階内西側千鳥破風室内(焼失)』を加工



## 2) 『大天守地階の御金蔵の間仕切りの壁板とされている部材（徳川林政史研究所所蔵）』による木部の仕上げ

『大天守地階の御金蔵の間仕切りの壁板とされている部材（徳川林政史研究所所蔵）』の加工痕跡により、近世の板材の製材する過程として、板子（角材）の製材時には斧（ヨキ）を使用し、板の製材過程では大鋸（オガ）や鉦を使用された可能性があると説明した。 ※第17回天守閣部会

- ・『ガラス乾板写真』では、部材の見え掛りの材面において凹凸の大きい箇所の表面の状態は推測できたが、それ以外の箇所では表面の状態の判断は難しい。  
基本的には、写真で判断できない程の平滑な仕上げであったことが推測される。
- ・『小天守地階の蔵内部の壁胴縁』など、普段目に晒られる機会の少ない箇所は、凹凸が比較的確認できる程度の平滑な加工であったことが推測される。

※注記なき限り、掲載する写真の所蔵・引用元は、名古屋城総合事務所

## 2. 名古屋城隅櫓の木部の仕上げについて

※『名古屋城東南隅櫓』と『名古屋城西南隅櫓』で木部の仕上げについて現地確認を行った。今回、『名古屋城東南隅櫓』の現地調査結果を説明する。

## 1) 部材に全体的にライトを照らした状況

⇒柱、梁、貫、根太、床板、壁板、天井(床の化粧裏板) の見え掛り部の材面において、貫でわずかに凹凸は確認できたが、その他は目立った凹凸は確認できないほど非常に平滑な仕上がりであった。

柱



名古屋城東南隅櫓 一階柱  
(竹中工務店撮影)

角梁



名古屋城東南隅櫓 一階角梁底部  
(竹中工務店撮影)

丸太梁



名古屋城東南隅櫓 一階丸太梁底部  
(竹中工務店撮影)

貫



名古屋城東南隅櫓 一階貫  
(竹中工務店撮影)

根太



名古屋城東南隅櫓 三階根太  
(竹中工務店撮影)

床板



名古屋城東南隅櫓 三階床板  
(竹中工務店撮影)

壁板



名古屋城東南隅櫓 二階壁板  
(竹中工務店撮影)

天井(床の化粧裏板)



名古屋城東南隅櫓 二階天井(三階床の化粧裏板)  
(竹中工務店撮影)

2. 名古屋城隅櫓の木部の仕上げについて

※『名古屋城東南隅櫓』と『名古屋城西南隅櫓』で木部の仕上げについて現地確認を行った。今回、『名古屋城東南隅櫓』の現地調査結果を説明する。

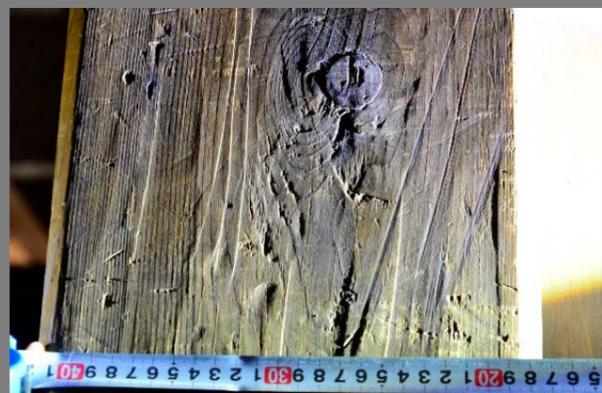
2) 部材にライトをあてる角度を調整し、加工痕跡を確認した状況

⇒部材に全体的にライトで照らしただけでは、加工痕跡は確認できなかったが、ライトをあてる角度を調整することで凹凸を際立たせることができ、加工痕跡の確認ができた。

柱



名古屋城東南隅櫓 一階柱



細幅の台鉋による仕上げ



檜鉋による仕上げ(上記撮影部の上部)

角梁



名古屋城東南隅櫓 一階角梁底部



鉋による仕上げ



加工痕跡がはっきりしない。檜鉋による可能性がある仕上げ(他の一階角梁)

丸太梁



名古屋城東南隅櫓 一階丸太梁底部



鉋による仕上げ



鉋による仕上げ(上記撮影部材の柱際)

貫



名古屋城東南隅櫓 一階貫



鉋による仕上げ



細幅の台鉋による仕上げ(二階貫(階段踊り場))

## 2. 名古屋城隅櫓の木部の仕上げについて

※『名古屋城東南隅櫓』と『名古屋城西南隅櫓』で木部の仕上げについて現地確認を行った。今回、『名古屋城東南隅櫓』の現地調査結果を説明する。

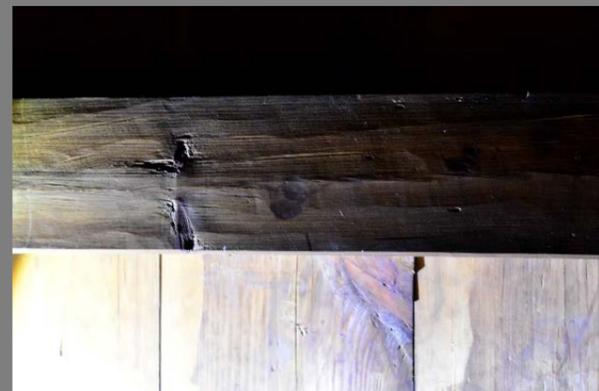
## 2) 部材にライトをあてる角度を調整し、加工痕跡を確認した状況

⇒部材に全体的にライトで照らしただけでは、加工痕跡は確認できなかったが、ライトをあてる角度を調整することで凹凸を際立たせることができ、加工痕跡の確認ができた。

根太



名古屋城東南隅櫓 三階根太



槍鉋や細幅の台鉋による仕上げ

床板



名古屋城東南隅櫓 三階床板



鉋による仕上げ

壁板



名古屋城東南隅櫓 二階壁板



槍鉋による仕上げ(一部、細幅の台鉋仕上げ)

床の化粧裏板(天井)



名古屋城東南隅櫓 二階天井板(階段踊り場上部)



槍鉋による仕上げ

※柱や壁板は、槍鉋や細幅の台鉋で極めて平滑に仕上げられており、梁は鉋で非常に平滑に仕上げられており、いずれもライトをあてる角度を調整しなければ加工痕跡が判断できないほど平滑であった。



現代において、容易に再現できない往時の優れた高い技術で仕上げられていた。

3. 他の城郭建築類例による木部の仕上げについて(事例の一部)

細幅の台鉋や槍鉋、鉾などで非常に平滑に仕上げられた部材

○大阪城千貫櫓

元和6年(1620) [文化遺産オンラインより]

【一階入側柱】

細幅の台鉋の仕上げ。(部分的に鉾の加工痕跡がある)  
仕上げは、光を当てないと確認できないほどの平滑な仕上がり。



細幅の台鉋で仕上げられた柱(部分的に鉾の加工痕跡有り)  
(竹中工務店撮影 大阪城千貫櫓 一階入側柱)

【一階外周の櫓の化粧壁板】

鉾による非常に平滑な仕上げ



鉾で仕上げられた壁板  
(竹中工務店撮影 大阪城千貫櫓 一階外周壁板)

鉾で仕上げられた部材

○犬山城天守

慶長6年(1601)頃

※年代には諸説あり、1・2階は当初、3・4階は増築とされている。

【地下一階柱】

鉾で加工されている。



鉾で加工された柱  
(竹中工務店撮影 犬山城天守 地下一階柱)

○松江城天守

慶長16年(1611) [文化遺産オンラインより]

【四階繫丸太梁】

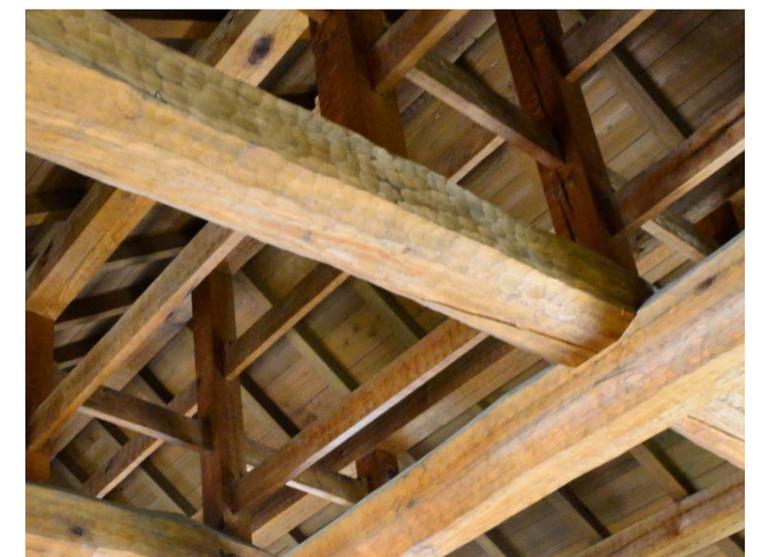
鉾で加工されている。



鉾で加工された繫丸太梁  
(竹中工務店撮影 松江城天守 四階繫丸太梁)

○松江城太鼓櫓(復元) 平成13年(2001)

鉾で丁寧に仕上げられている。



鉾で仕上げられた丸太梁  
(竹中工務店撮影 松江城太鼓櫓 丸太梁)

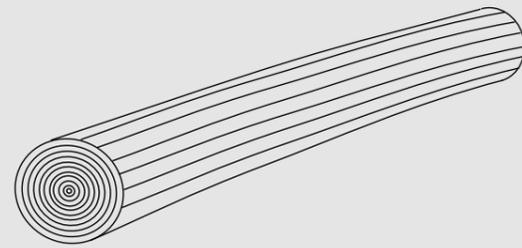
4. 往時の木部の加工手順の推測

○加工痕跡による名古屋城隅櫓（東南隅櫓・西南隅櫓）の加工手順の推測

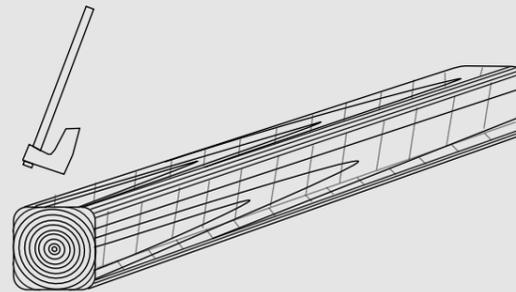
・推測した柱・角梁の加工手順(イメージ)

**柱・角梁** ※角梁においては、鉋による表面の加工で仕上げたこともある。

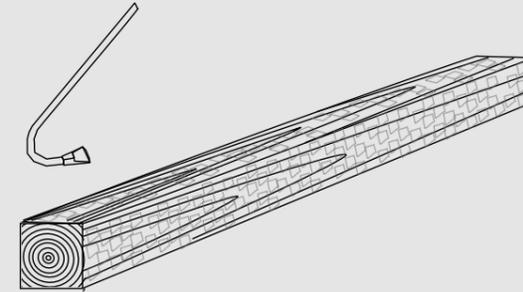
①原木



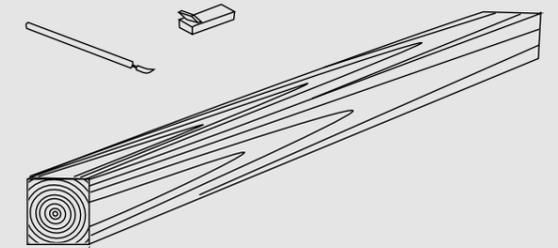
②斧（ヨキ）による杢角（ソマカク）の製材



③鉋（チョウナ）による表面の加工

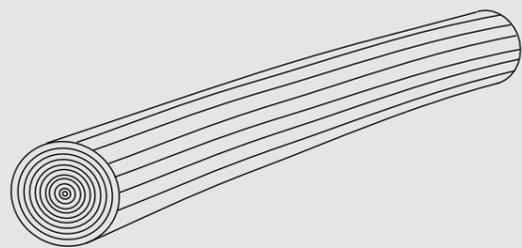


④槍鉋や細幅の台鉋で加工（仕上げ）

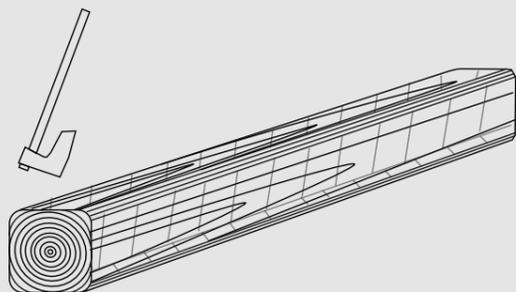


**板材**

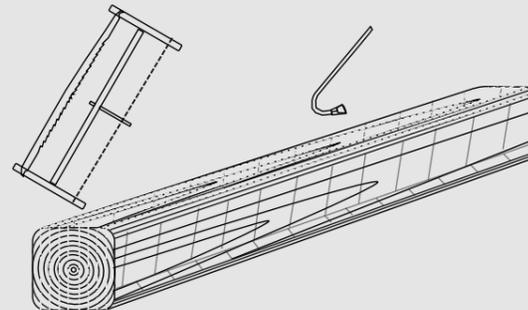
①原木



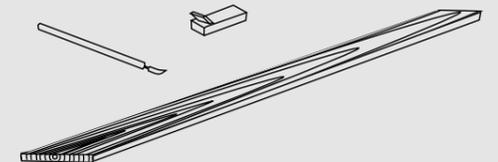
②斧（ヨキ）による板子（イタコ）の製材



③大鋸（オガ）鉋（チョウナ）による表面の加工

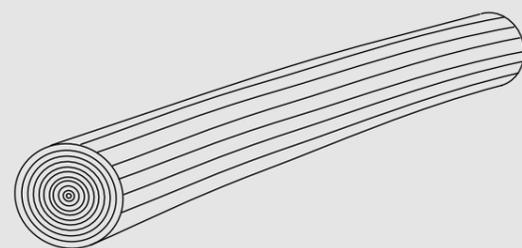


④槍鉋や細幅の台鉋で加工（仕上げ）

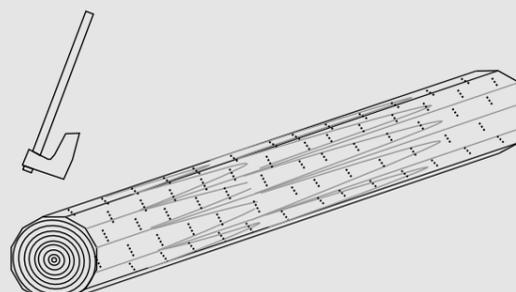


**丸太梁**

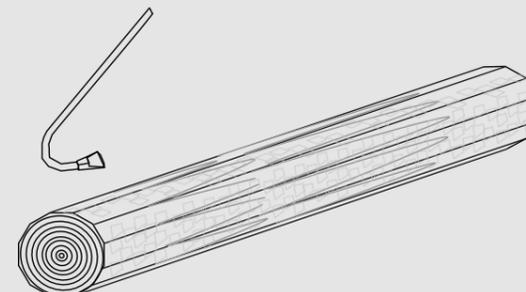
①原木



②斧（ヨキ）による粗加工



③鉋（チョウナ）による表面の加工



## 5. 史実としての天守の木部の仕上げのまとめ（復元原案）

### ○往時の仕上げについて推測される意図に関する考察

- ・名古屋城東南隅櫓・西南隅櫓の木部において、細幅の台鉋や槍鉋、鉋の加工痕跡を確認した。鉋による加工痕跡も目視で簡単に確認できるような加工痕跡ではなく、非常に平滑に仕上げられており、**いずれも現代において、真似ることが非常に困難な往時の優れた高い技術(非常に平滑な仕上げ)で仕上げられていた。**
- ・『小天守地階の蔵の部屋で鉋で加工された壁胴縁(ガラス乾板写真)』や『大天守地階の御金蔵の間仕切りの壁板とされている部材(徳川林政史研究所所蔵)』からは、蔵など普段は目に晒されない所では、加工の仕上がりの程度を抑えてあり、**仕上げる所とそうでない所とでメリハリをつけている傾向があった可能性がある。**

### ○復元原案

**※天守の仕上げは、凹凸がはっきりとわかるような面の仕上がりではなく、平滑に仕上げとすることを復元原案の原則とする。**

復元原案としての推測される天守の木材の仕上げは以下の通り。

- ・柱は、細幅の鉋や槍鉋を用いた極めて平滑な仕上げ。
- ・角梁は、鉋や槍鉋などを用いた非常に平滑な仕上げ。
- ・丸太梁は、鉋や斧などを用い凹凸が大きい面とならないような平滑な仕上げ。
- ・長押や壁板などの造作材は、柱と同様の仕上げ。
- ・大天守地階の壁など、普段使いとして見え隠れとなる部分は大鋸挽きや斧による平滑な加工のまま。
- ・小屋裏など野物材は、木取りした状態のまま。

## 6. 名古屋城天守閣木造復元における木部の仕上げ（復元案）

### ○木部の仕上げに関する方針について

1. 文化財建造物修理や復元工事に使用されてきた加工方法を原則とする。
2. 往時の木材加工方法・表面仕上げの目的・意図を汲み取った仕上げのグレードとする。
3. 往時の加工形状を再現する。
4. 現代における職能問題(熟練工の人手不足や技能継承)を踏まえる。
5. 往時の仕上げの加工方法を忠実に再現した部分と生産性を配慮した部分とでメリハリをつける。

### ○復元案

- ・文化財建造物修理や復元工事に使用されてきた加工方法に倣う。
- ・場所を選定及び限定して、往時の技法(細幅の台鉋や槍鉋、鉋や斧などを想定)で仕上げる。
- ・目につくような見え掛り部は、凹凸が大きくなる鉋などでは基本的には仕上げず、手加工による台鉋仕上げもしくはそれに相当する仕上げとする。
- ・目につきにくいような見え隠れ部は、平滑な加工のままとする。
- ・継手・仕口において、大工が手加工などで最終的に仕上げる。

※工期・コストを考慮し、復元案の仕上げを検討する。

## 飾金具について

ここでは大天守、小天守の内外部六葉金具、破風板の飾金具について、復元原案、復元案を示す。

## 1.復元原案根拠史料の概要

上記金具について記されている史料の概要を表1に示す。

(表1)飾り金具について記された主な史料

遺物				
・名古屋城所蔵焼損遺物			名古屋城総合事務所	・破風板飾り焼損遺物がある。
古写真				
・ガラス乾板写真	昭和15年～		名古屋城総合事務所	
・国寶建造物第一期第一韓 (名古屋城天守及小天守)	昭和8年	国寶建造物 刊行会		・小天守二階中央の間において、天井長押に六葉を確認できる。
建築図				
・昭和実測図			名古屋城総合事務所	・大天守一階、四階の六葉について詳細図がある。 ・破風板飾り金具の三ツ葉葵紋の数、小天守二階の天井長押六葉等、ガラス乾板写真で確認されるが実測図には描かれていない金具もある。
・昭和実測図野帳				・懸魚六葉の寸法を確認できる。 ・小天守一階、二階の六葉寸法を確認できる。
摺本・拓本				
・奈良文化財研究所蔵本			奈良文化財研究所	六葉等、計37点
・名古屋城総合事務所蔵摺拓本			名古屋城総合事務所	
絵図				
・宝暦修理関連史料「各層間取之図」			名古屋市鶴舞中央図書館	一階～五階の六葉について差し渡し寸法が記述されている。
文献史料				
・『金城録付属天守閣図面 御天守御修復取掛かり沿惣出来迄仕様之大法』		奥村得義	(写本)宮内庁 (写本)名古屋城総合事務所	*長押の釘隠しについて :「長押御釘隠し不残取放し、損/候分繕、不足之分新規仕足」(「掛札之留」) *破風の飾り金具について :「御金物磨、不足仕足/不残めつき箔差直打」(「掛札之留」) 「金減金逆輪御紋金物煮洗/箔指直し」(『仕様之大法』)
・『国秘録 御天守御修復』 「御天守御修復次第御用之輩姓名掛札之留」			徳川林政史研究所	*出典:麓和善・加藤由香「名古屋城大天守宝暦大修理における各部修理について」『日本建築学会計画系論文集 第75巻 第635号』2010年7月
・『国秘録 御天守御修復』			徳川林政史研究所	・大天守五重箱棟の御紋について:「箱棟両平御紋十四差渡一尺二寸五分めつき煮洗色付直地板漆入鋸釘取付」
・『金城温古録 第十之冊 御天守編之二 御天守部』 「御天守」	文政4年(1821) ～明治42年(1909)	奥村得義 奥村定	名古屋市蓬左文庫 公益財団法人東洋文庫 名古屋市鶴舞中央図書館	・大天守五階外部長押について :「赤銅煮黒めのかなぐ六葉を打付る」 ・大天守五重破風について :「銅包みの減金の御紋を打ちて付る」
・『金城温古録 第十二之冊 御天守編之四 天守考部』 「箱棟の御紋」				・大天守五重箱棟について :「御天守箱棟に金御紋一方に七個づつ付申候。」
・『金城温古録 第十四之冊 御天守編之六 図彙部』 「御飾御紋の事」 「南正面の口御門上二重目 附屋根唐破風之図」				・懸魚六葉、外部長押金具について:「懸魚の目、長押金具共に六葉形なり。但、なげしかなぐは赤銅。」 ・大天守唐破風の飾り金具について :「地板銅/御紋減金/大小打交」 ・大天守五重箱棟の御紋について :鯨の「真木真鉄取付方之図」に御紋の直径「一尺四寸」とある。

2. 六葉(内部)について

2-1 復元原案について

(1) 史料より分かること

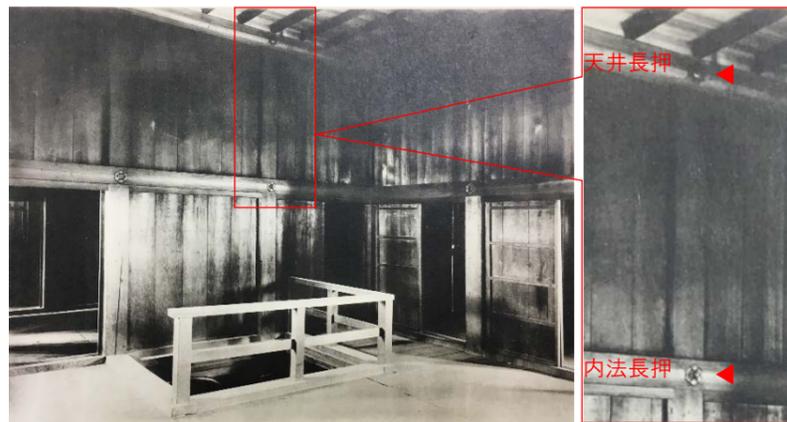
① 設置箇所について

基本的にガラス乾板写真と昭和実測図から六葉の設置位置を確認できるが、小天守二階の天井長押での六葉の有無については、史料間で食い違いが見られる。

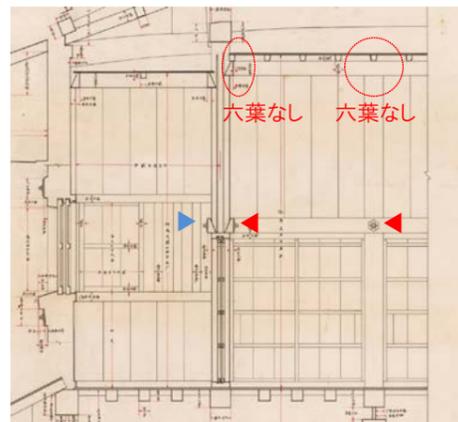
・小天守二階：天井長押での六葉の有無

古写真より、小天守二階中央の間では内法長押に加え、天井長押にも六葉が取り付けられていることがわかるが、昭和実測図では描かれていない。

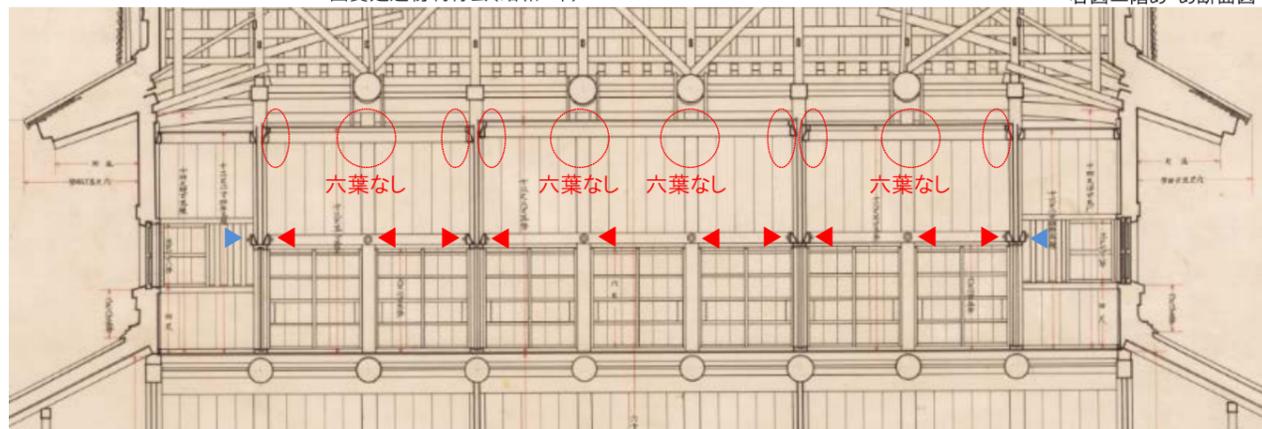
小天守二階の残りの二つの間について、天井長押の六葉を確認できる史料は無い。『金城温古録』の小天守「二重」の項に二階の三つの間について記述がある。「西を上御間とし 東を二御間とするが如し 中央は御階の間にて 上り下りの立通ひする所なれば、三の間の如し」とある。また、また、同じ項に二階について、「此所はもと御天守五重目の如く 御座の間の格に准ぜらるるにや」とある。これらの記述から、小天守二階自体の格、二階の三つの間での格がわかり、中央の間より東西の間が格が高かったことがわかる。従って、小天守二階は中央の間だけでなく東西の間の天井長押にも六葉があったと考えた。



『国寶建造物第一期第一輯(名古屋城天守及小天守)』  
国寶建造物刊行会(昭和8年)



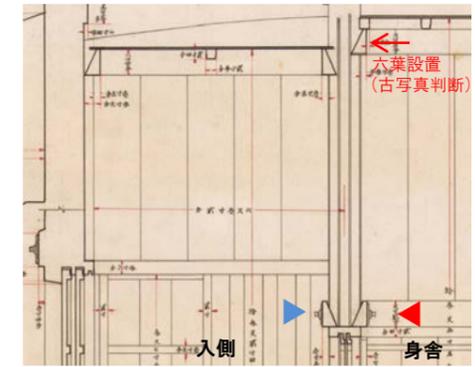
昭和実測図「名古屋城小天守矩計詳細図」(部分)  
右図二階あ-あ断面図



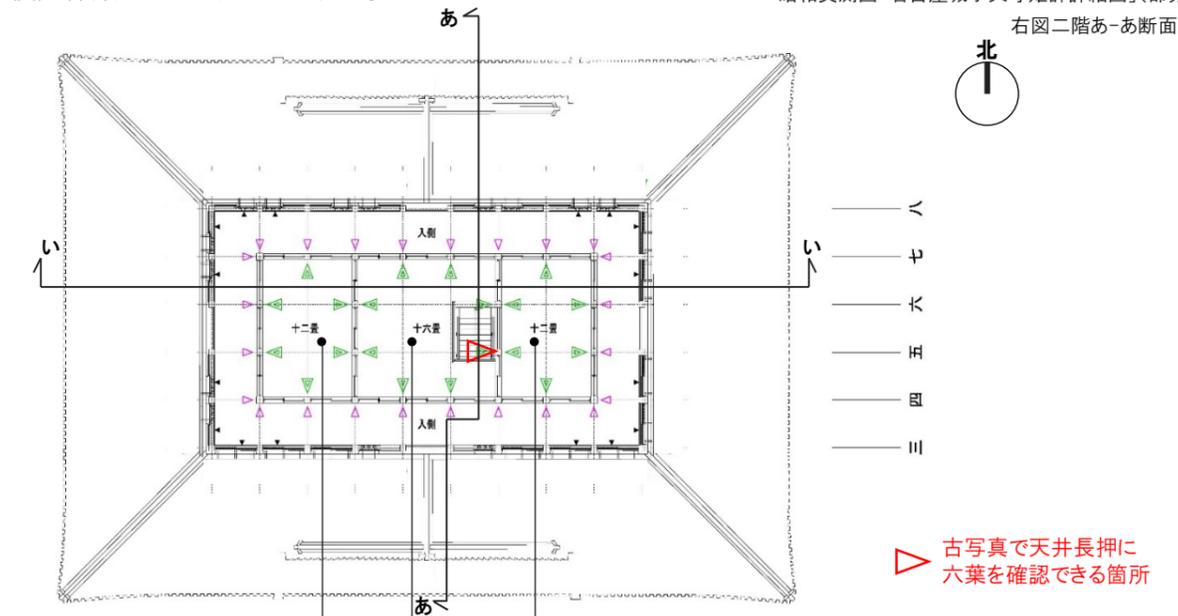
昭和実測図「名古屋城小天守二階平面図」(部分)  
右図二階平面図い-い断面

このことから天井板が張られていた小天守五階身舎と小天守二階身舎には全ての長押に六葉がつけられていたことになるが、この他に天井板が張られていた場所として小天守二階入側がある。

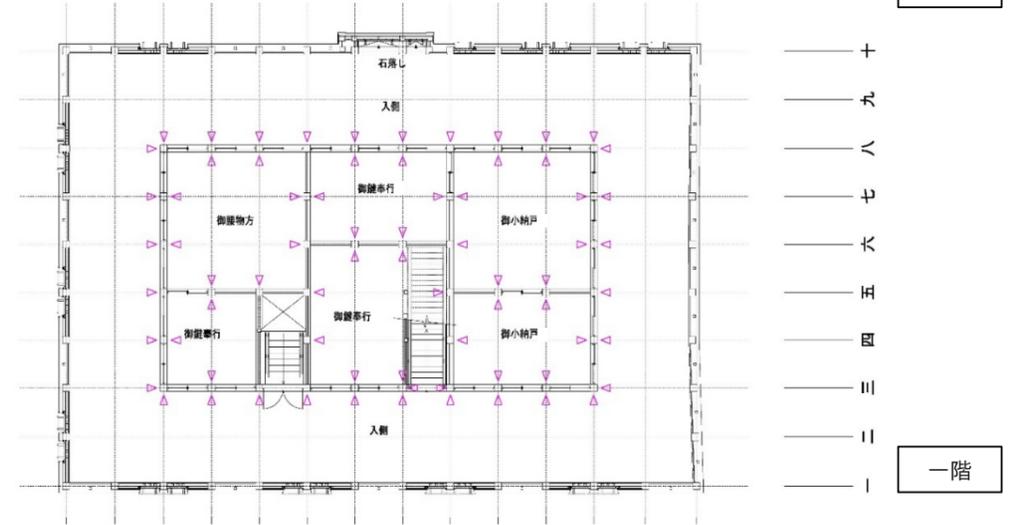
小天守二階入側について、また昭和実測図では、内法長押にのみ六葉が描かれている(右図▶部)。現時点で天井廻りのわかる古写真等の史料は見つかっていないため、現時点では昭和実測図通り六葉を設けないことと考えているが、その場合、釘頭現しとなるため、引き続き検証作業していくこととする。



昭和実測図「名古屋城小天守矩計詳細図」(部分)  
右図二階あ-あ断面図



『金城温古録』での記述 「上の御間」「三の間」「二の御間」

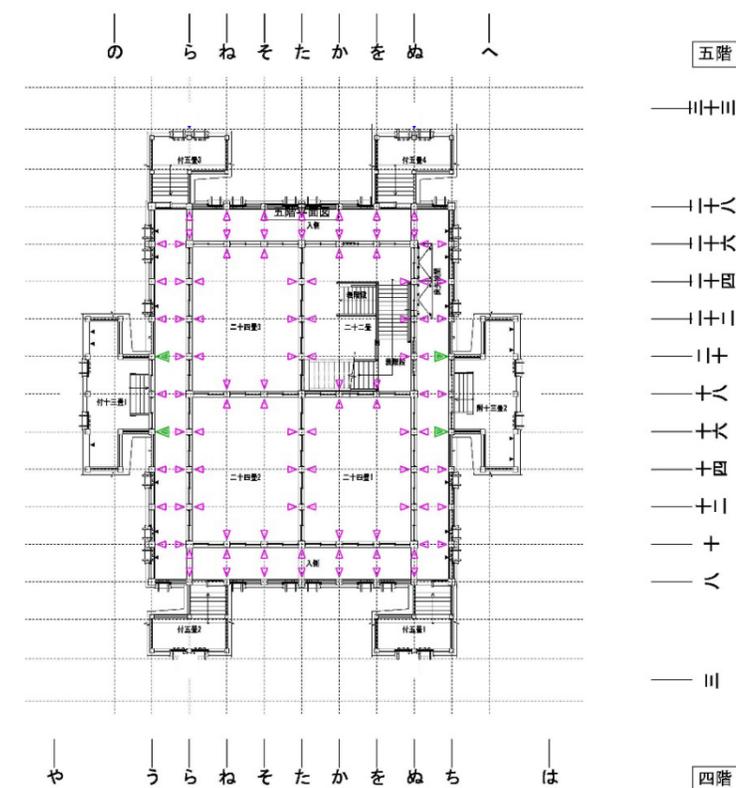
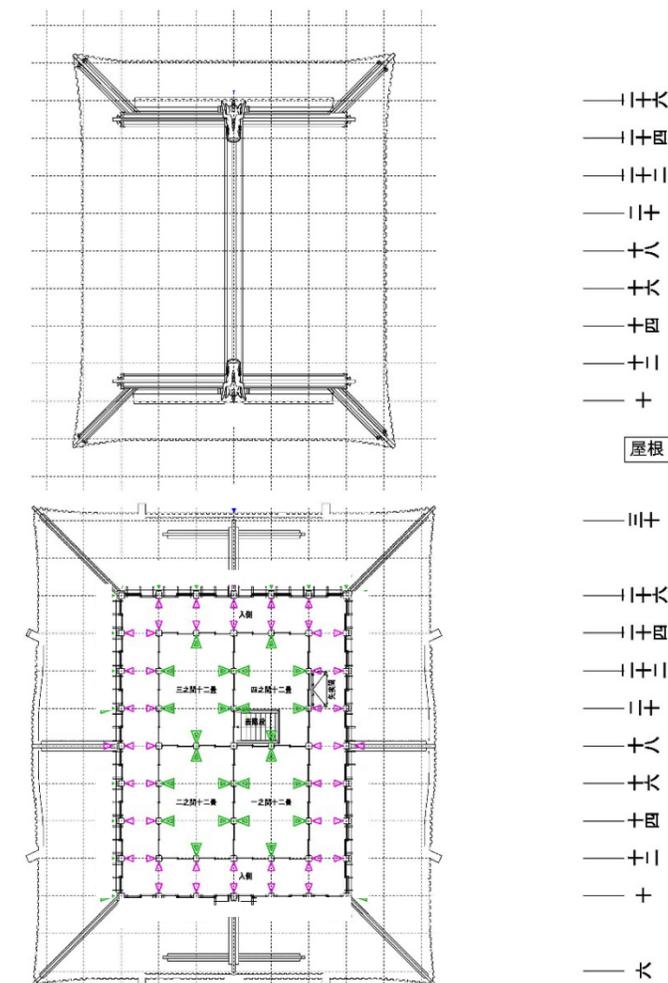
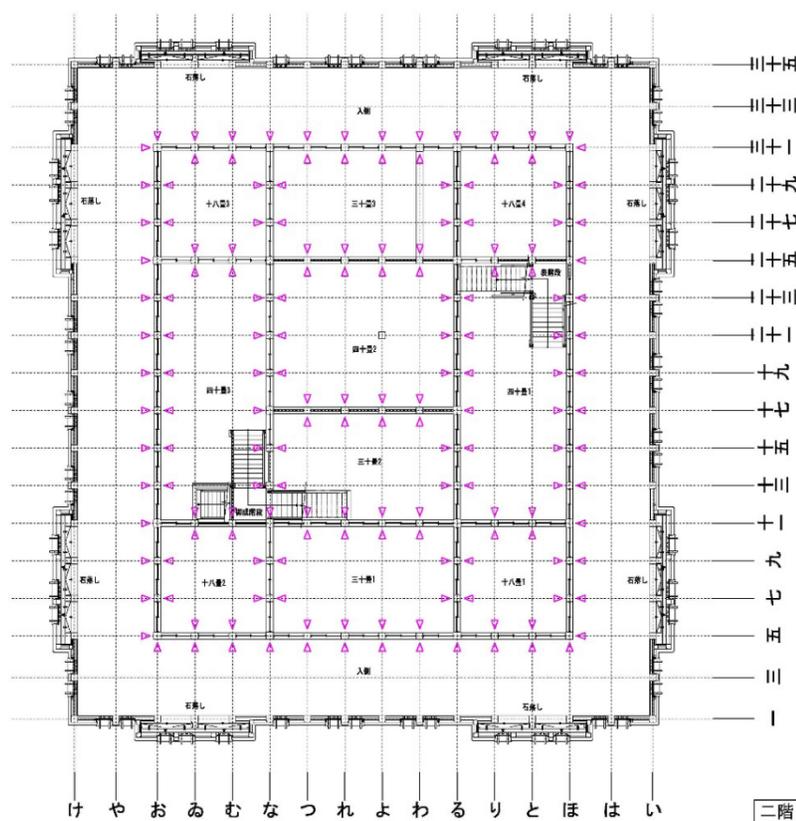
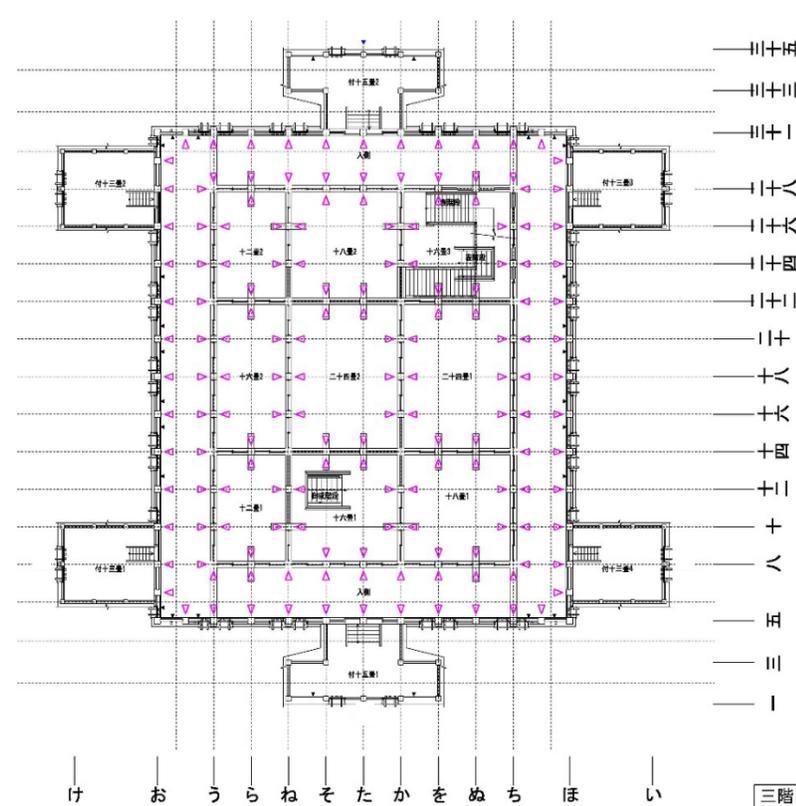
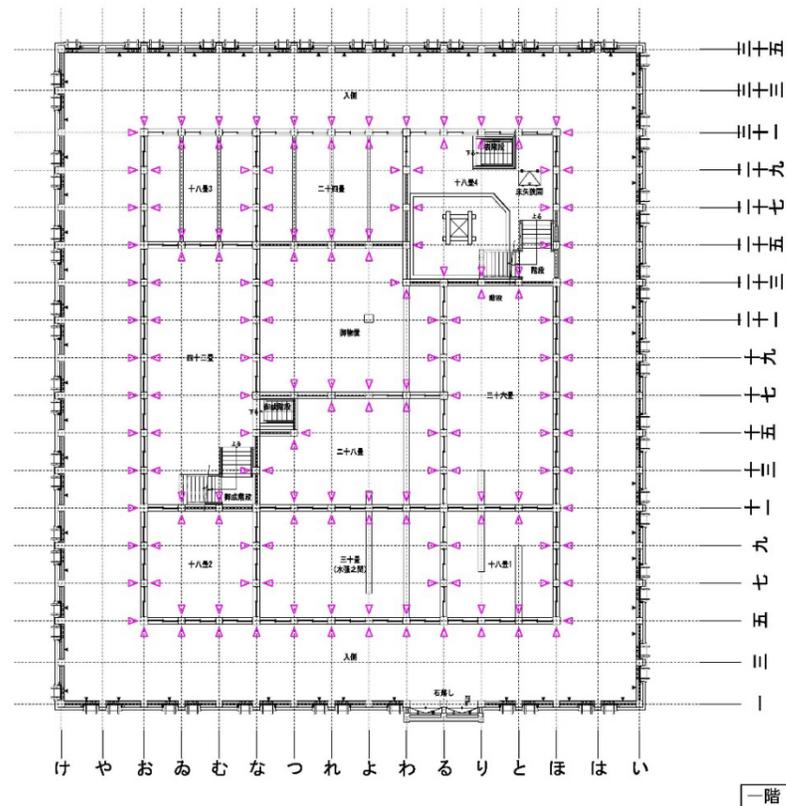


位置	直径		数量				備考	
	mm	R	入側内	入側外	身舎	外部		計
二階	152	0.50	24		40		64	身舎:内法長押と天井長押
一階	167	0.55	32		40		72	

凡例:六葉設置位置  
 ▼ 内法長押  
 ▼ 内法長押と天井長押

小天守の六葉配置図

① 設置箇所について



大天守 六葉 数量表

位置	直径		数量				備考
	mm	尺	入側内	入側外	身舎	外部	
五階	182	0.60	24	24	48		96 身舎:内法長押と蟻壁長押
四階	182	0.60	32	36	40		108 東西破風入口両端は2段
三階	218	0.72	40	48	72		160
二階	218	0.72	42		115		157
一階	218	0.72	52		114		166

凡例:六葉設置位置

- ▽ 内法長押
- ▽ 四階:段違いになった内法長押
- ▽ 五階:内法長押と蟻壁長押

大天守の六葉配置図

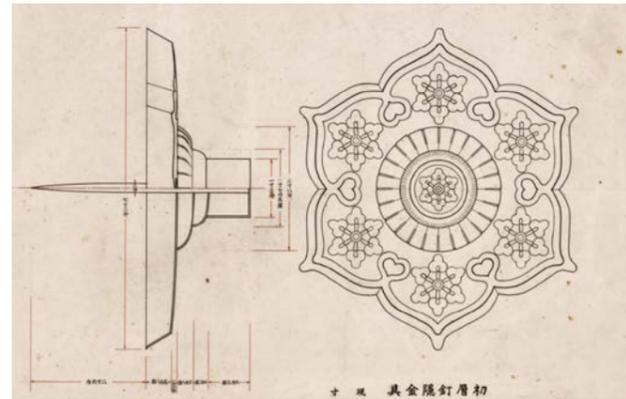
2. 六葉(内部)について

2-1 復元原案について

(1) 史料より分かること

②-1 大天守内部六葉の寸法について

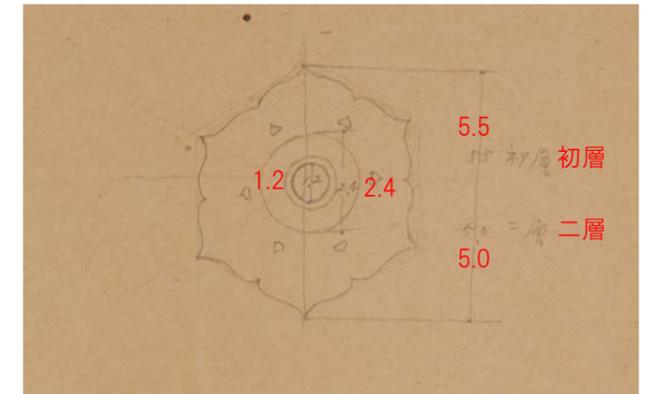
- 一、四階  
昭和実測図に一階、四階の六葉詳細図があり寸法を確認することができる。
- 二、三、五階について  
昭和実測図から、一階と四階で長押と六葉寸法比率がほぼ同じであることから、この比率を基準に宝暦修理関連史料「各層間取之図」に記された寸法、昭和実測図での分一寸法ガラス乾板写真での長押、六葉の比率を検証し、六葉の寸法の復元原案寸法を設定した。



昭和実測図「名古屋城天守金具詳細図」(部分)  
(名古屋城総合事務所 蔵)

②-2 小天守内部六葉の寸法について

小天守内部六葉については野帳より  
一階：五寸五分  
二階：五寸  
と確認でき、樽ノ口は何れも径一寸二分であることがわかる。



小天守野帳(部分)(名古屋城総合事務所 蔵)

(単位:尺)

大天守内部長押、六葉寸法検証リスト

階	昭和実測図	長押						六葉					六葉寸法設定理由	
		昭和実測図分一寸法			復元案設定寸法			六葉詳細図記載寸法	宝暦修理関連史料	ガラス乾板写真検証寸法	昭和実測図分一寸検証	長押見附寸法との比率 六葉寸法/長押寸法		六葉寸法(径) 復元原案=復元案
		入側		外壁側	入側		外壁側							
長押	蟻壁長押	長押	長押	蟻壁長押	長押	六葉寸法(径)								
五階	図62	0.77	0.78	0.77					入側 0.58 0.59 0.61 0.59	0.66(図61) 0.68(図61) 0.68(図77) 0.70(図82) 0.72(図82) 0.70(図73) 0.71(図73)	・六葉成0.6の場合 ⇒≒0.78  ・六葉成0.55の場合 ⇒≒0.42	0.6	・四階と五階の長押寸法がほぼ同じ。 ・ガラス乾板写真検証での寸法分布が昭和実測図詳細寸法をほぼ同じ。 ⇒五階の六葉寸法を四階と同じ0.6とした。	
	図85	0.77	—	0.77	0.77	0.77	—	0.55						
	図100	0.77	0.78	0.77										
四階	図62	0.78	—	—			0.6	0.62	外壁側 0.61 0.62 0.61 0.62	≒0.77	0.6	・昭和実測図の詳細図寸法を採用		
	図83	0.77	—	0.75	0.78	—							0.78	
	図84	0.78	—	—										
三階	図61	0.89	—	0.89			—	0.62	入側 0.72 0.75 0.71 0.71	・六葉成0.72の場合 ⇒≒0.8  ・六葉成0.62の場合 ⇒≒0.69	0.72	・一、二階六葉寸法と同じとした場合の長押と六葉の比率が一階、四階と近い。 ・ガラス乾板写真、昭和実測図検証での寸法分布が一階、二階六葉寸法と近い。 ⇒三階の六葉寸法を一、二階と同じ0.72とした。		
	図73	0.88	—	0.88	0.9	—							0.9	
	図77	0.89	—	0.89										
	図82	0.89	—	0.89										
二階	図60	0.94	—	—			—	0.7	入側 0.74 0.74 0.73 0.74		0.72	・一、二階の長押寸法が同じ。 ・「各層間取之図」で一、二階の六葉寸法が同じ。 ⇒昭和実測図詳細図寸法を採用し、一、二階共に0.72とした。		
	図73	0.95	—	—	0.95	—							—	
	図77	0.94	—	—										
一階	図60	0.95	—	—			0.72	0.7	入側 0.71 0.75 0.75 0.74 0.72	≒0.76	0.72	・昭和実測図の詳細図寸法を採用		
	図77	0.95	—	—	0.95	—							—	

## 2. 六葉(内部)について

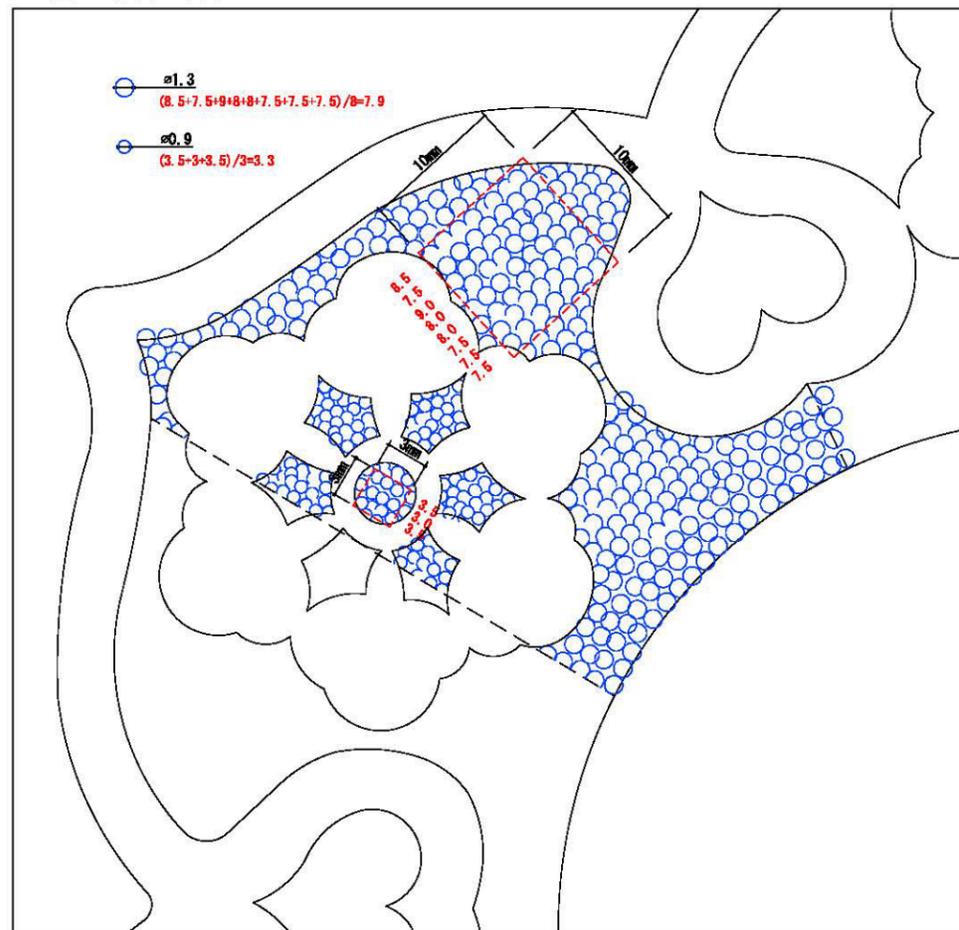
## 2-1 復元原案について

## (1) 史料より分かること

## ③ 魚々子について

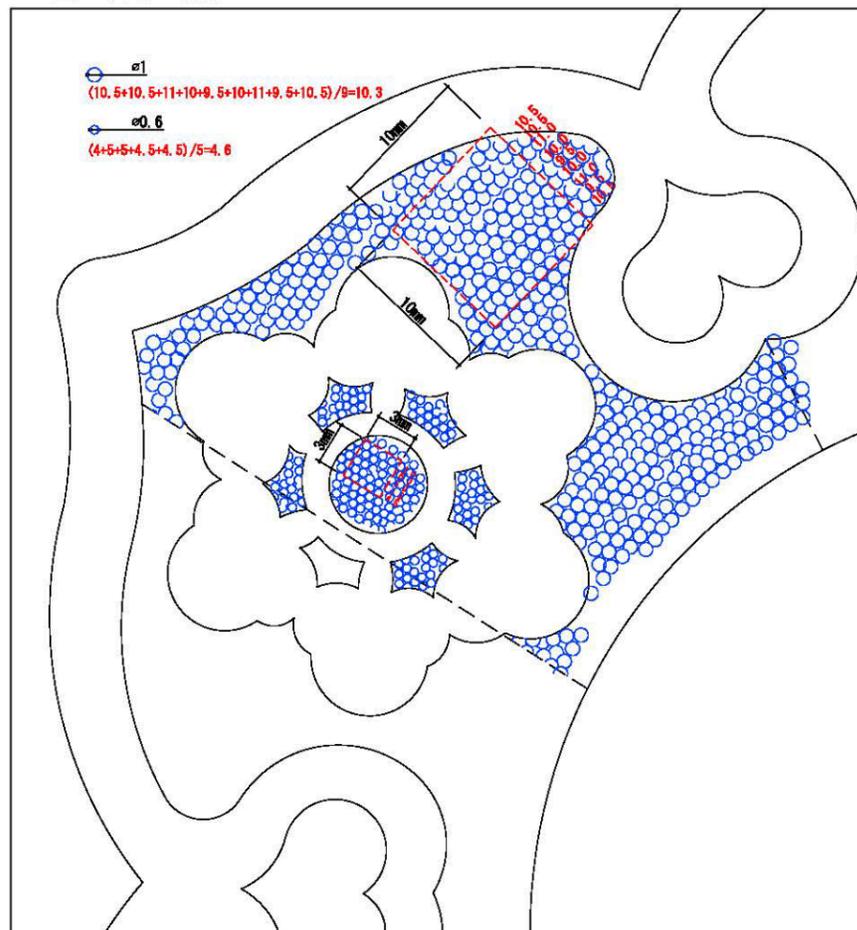
摺本の分析より魚々子の復元原案寸法を紋様内部は直径0.6mm、一般部は直径0.98mmとした。

01\_四層六葉1



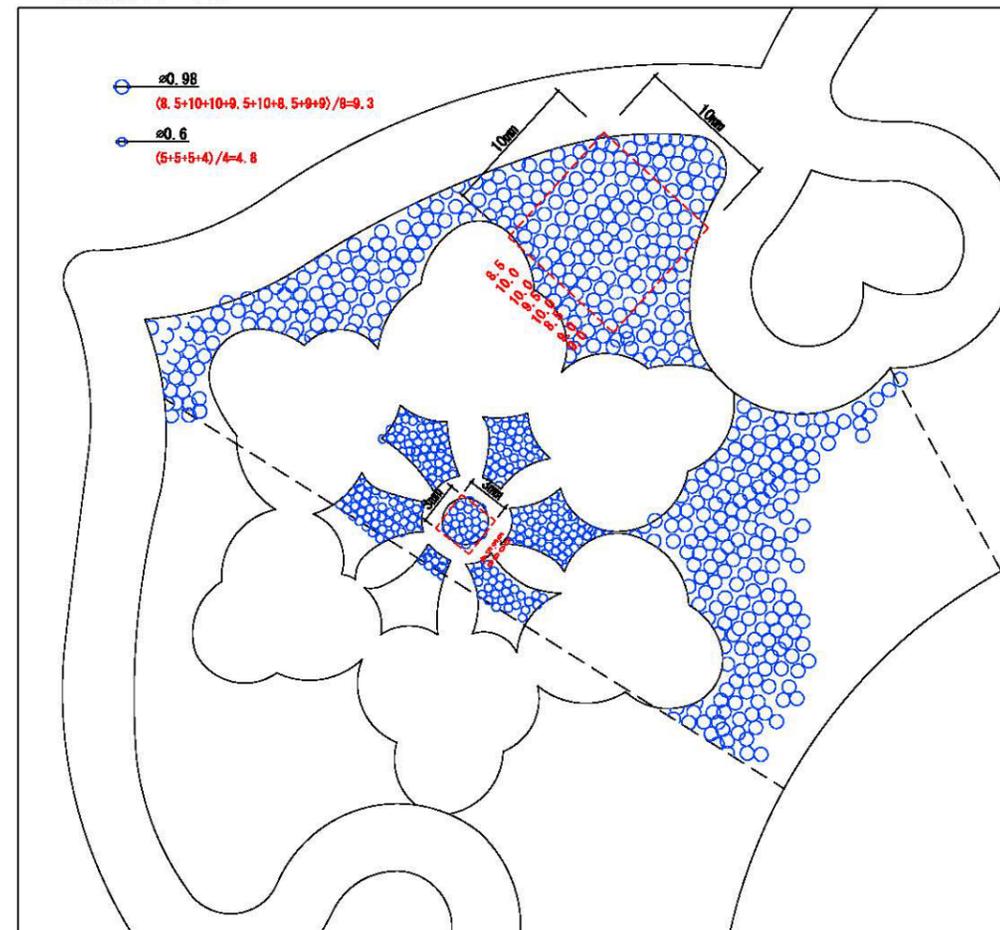
原寸x2倍

02\_四層六葉2



原寸x2倍

03\_初層六葉



原寸x2倍

(全ての原本は奈良文化財研究所蔵。検証のためにCADでトレース)

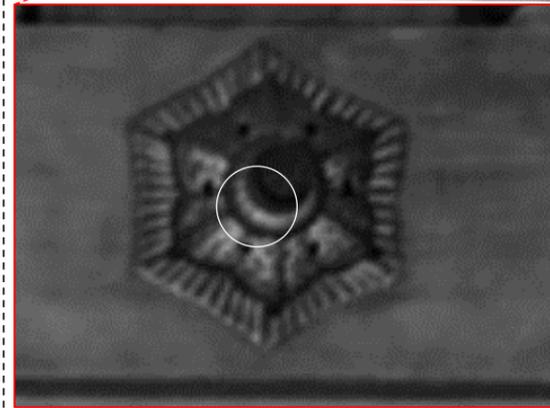
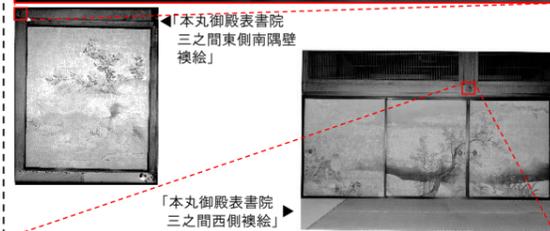
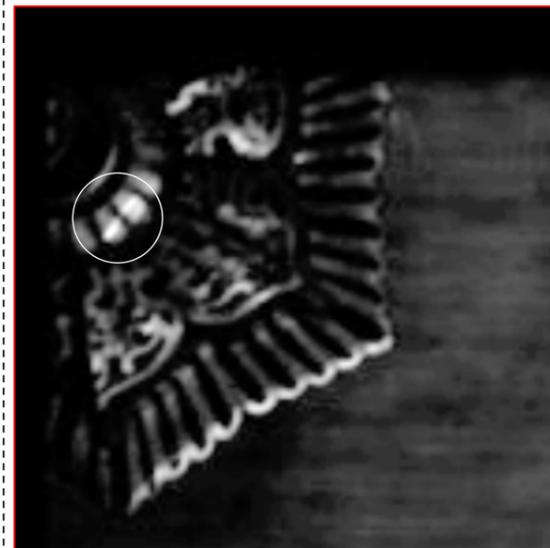
2. 六葉(内部)について

2-1 復元原案について

(1) 史料より分かること

④ 仕上仕様について

文献史料に具体的な記述は確認できていない。大天守内部のガラス乾板写真、本丸御殿での飾金具検証から、現時点では、内部の六葉について下記仕様を復元原案とした。魚々子部分の仕上げ、菊座での透かしの有無、小天守の六葉の仕上仕様等、本丸御殿での検証内容も参照しながら、引き続き検証していく。

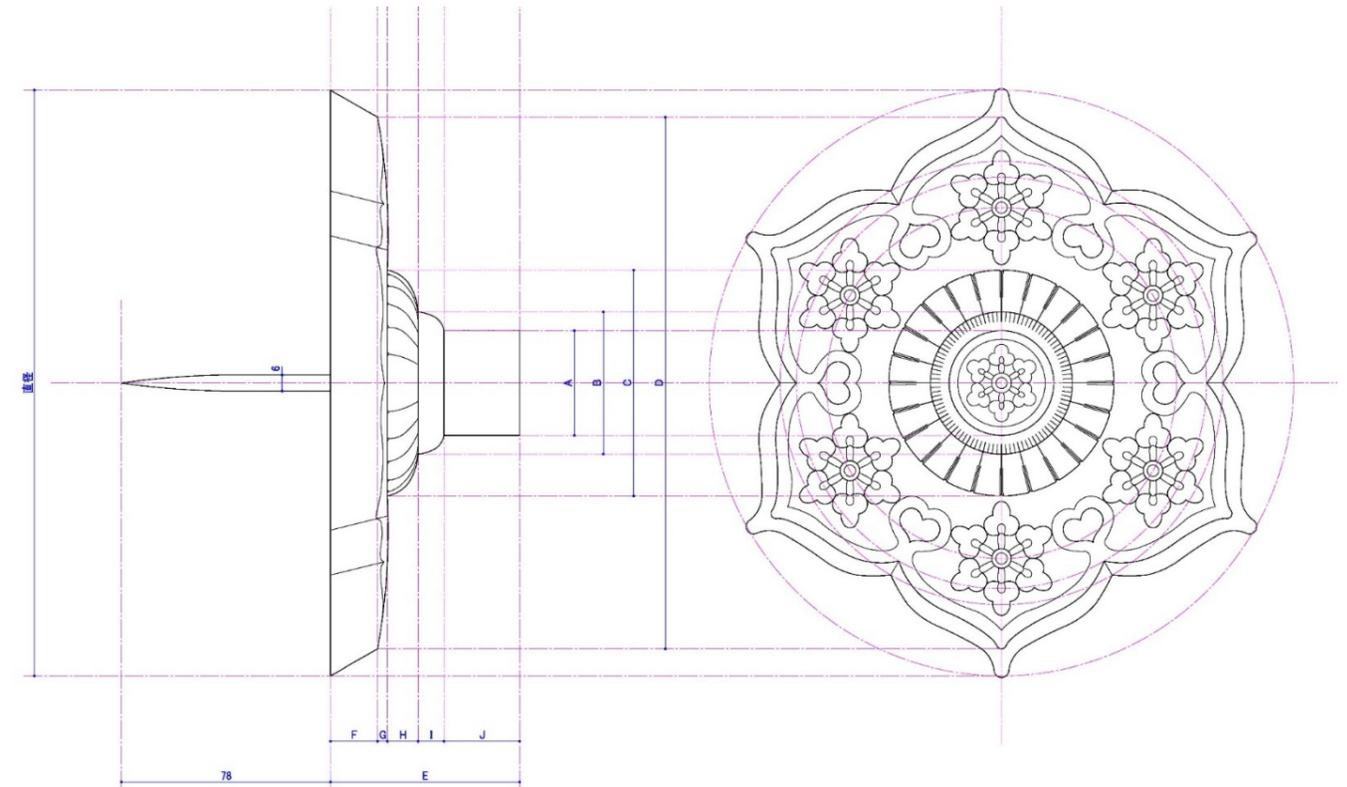


ガラス乾板写真(左)「天守閣四階内西側千鳥破風室内入口」(部分)

本丸御殿ガラス乾板写真での菊座の見える方:検証例

・上記二つの画像共に、本丸御殿表書院三之間のガラス乾板写真。画像(上)では菊座に透かしがあると見て取れるが、同じ間の別の六葉(画像(下))では、判別しづらい。

(2)六葉寸法・仕様の復元原案のまとめ



大天守 六葉 寸法表

位置	直径		各部位寸法									
	mm	尺	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
五階	182	0.60	34.9	47.0	75.9	164.4	57.7	15.2	1.5	11.2	7.0	22.8
四階	182	0.60	34.9	47.0	75.9	164.4	57.7	15.2	1.5	11.2	7.0	22.8
三階	218	0.72	39.5	53.1	85.0	197.3	70.7	17.6	3.6	11.5	9.7	28.2
二階	218	0.72	39.5	53.1	85.0	197.3	70.7	17.6	3.6	11.5	9.7	28.2
一階	218	0.72	39.5	53.1	85.0	197.3	70.7	17.6	3.6	11.5	9.7	28.2

小天守 六葉 寸法表

位置	直径		各部位寸法									
	mm	尺	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
二階	152	0.50	36.4	49.0	72.8	137.0	49.1	12.2	2.5	8.0	6.7	19.6
一階	167	0.55	36.4	49.0	72.8	150.7	54.0	13.4	2.8	8.8	7.4	21.5

2-2 復元案について

基本的に復元原案の寸法、仕上仕様を踏襲し復元案とするが、引き続き検証していく。

(特記無き限り 名古屋城総合事務所蔵)

3. 六葉(外部)について

3-1 復元原案について

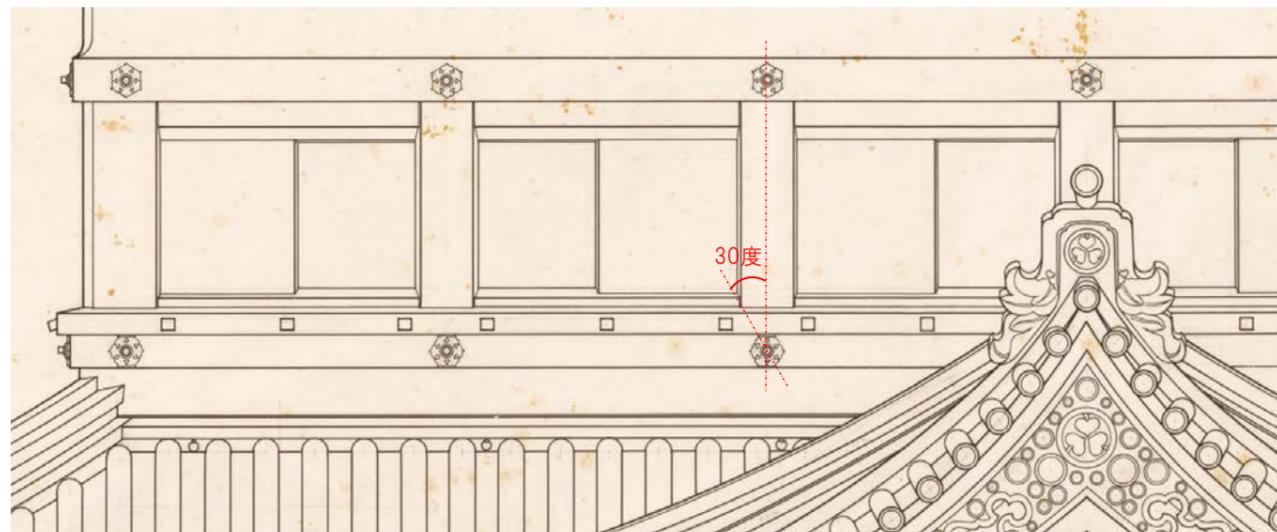
(1) 史料より分かること

① 設置箇所について

基本的にガラス乾板写真、昭和実測図から六葉の設置位置を確認でき、『金城温古録』の絵図、記述でも確認できる。

- ・設置箇所：大天守五階腰長押、内法長押  
：小天守二階腰長押、内法長押  
：大、小天守懸魚

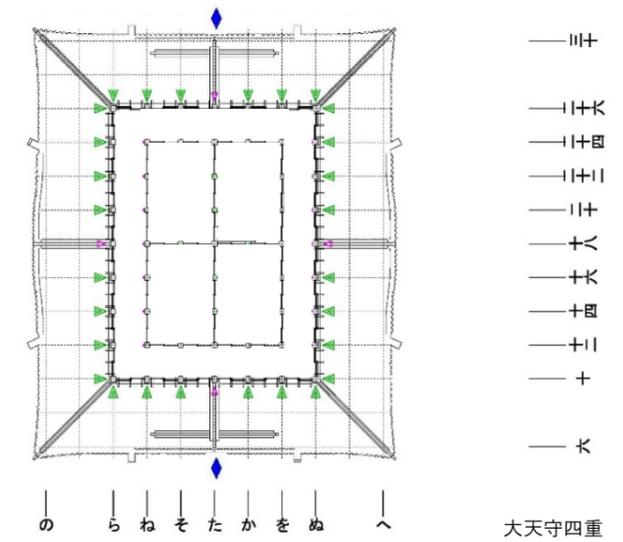
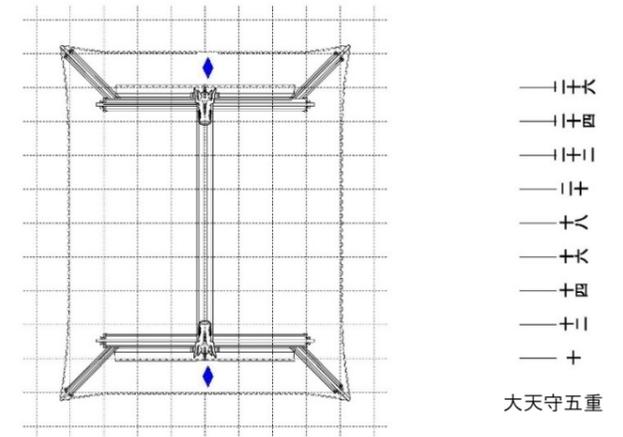
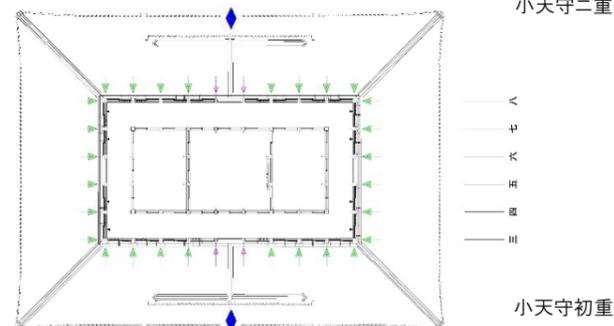
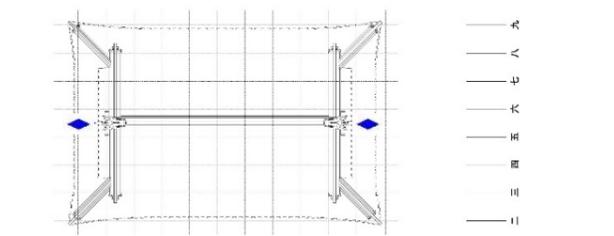
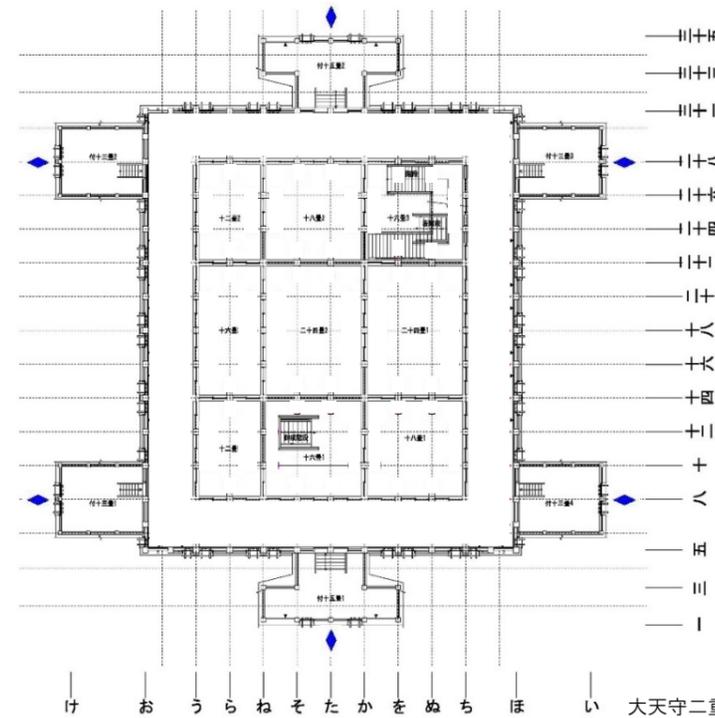
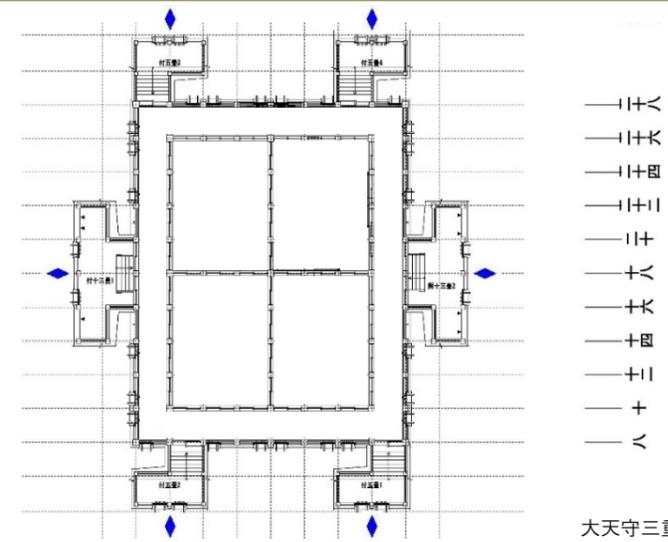
また、取り付けの向きについて、大天守五階腰長押の六葉は、30度回転している。



昭和実測図「名古屋城天守四層南側千鳥破風姿及断面詳細図」(部分)



ガラス乾板写真「名古屋城天守南面(小天守上ヨリ望ム)」(部分)



大天守 六葉 数量表

位置	直径		数量				計
	mm	尺	入側内	入側外	身舎	外部	
五階外長押 南北	231	0.76				26	26
五階外長押 東西	231	0.76				34	34
五重破風 南北	546	1.80				2	2
四重破風 南北	395	1.30				2	2
三重破風 南北	546	1.80				4	4
三重破風 東西	743	2.45				2	2
二重破風 南北	652	2.15				2	2
二重破風 東西	546	1.80				4	4

小天守 六葉 数量表

位置	直径		数量				計
	mm	尺	入側内	入側外	身舎	外部	
二階外長押 南北	203	0.67				36	36
二階外長押 東西	203	0.67				24	24
二重破風 東西	440	1.45				2	2
初重破風 南北	461	1.52				2	2

凡例：六葉設置位置  
 ▲ 内法長押  
 ▼ 内法長押と天井長押  
 ◆ 破風懸魚部

(特記無き限り 名古屋城総合事務所蔵)

3. 六葉(外部)について

3-1 復元原案について

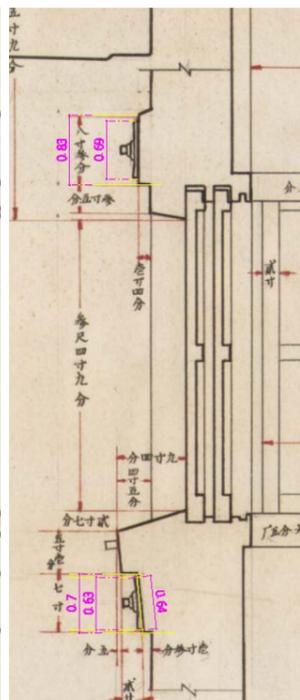
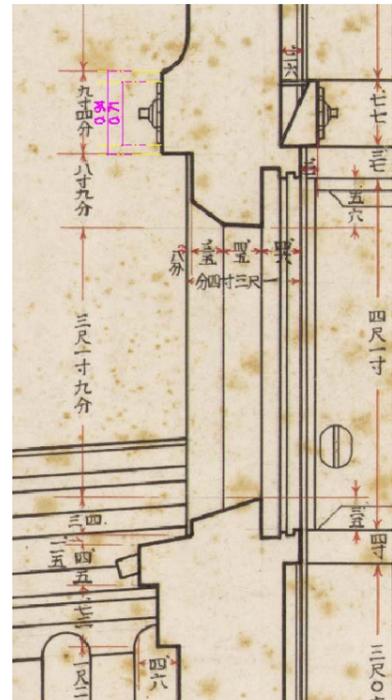
(1) 史料より分かること

② 寸法について

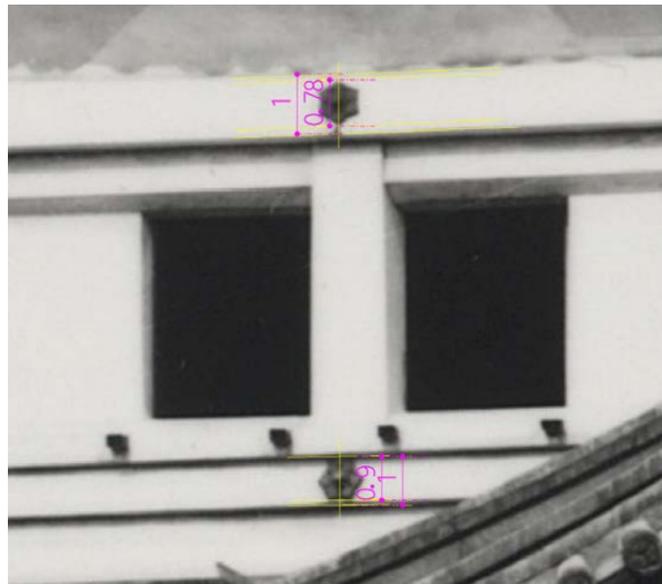
・大天守五階、小天守二階の外周長押の六葉の寸法について記された史料は確認できず、昭和実測図での分一寸法により検証を行った。

・大天守五重 内法長押六葉 成： 七寸五分  
腰 長押六葉 幅： 七寸五分

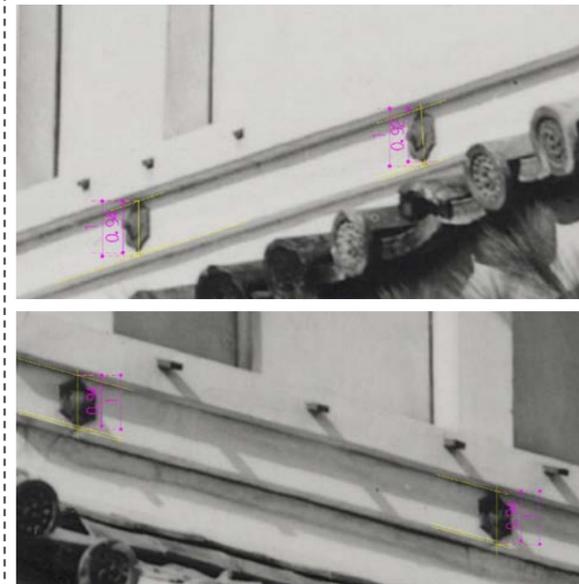
・小天守二重 内法長押六葉 成： 六寸七分  
腰 長押六葉 成： 六寸七分



昭和実測図 「名古屋城天守五層小屋組詳細図」(部分) 「名古屋城天守四層南側千鳥破風姿及断面詳細図」(部分) 「名古屋城小天守北側立面図」 「名古屋城小天守矩計詳細図」(部分)



ガラス乾板写真「名古屋城天守南面(小天守上ヨリ望ム)」(部分) 大天守検証例



ガラス乾板写真「名古屋城小天守南西面」(部分) 小天守検証例

③ 仕上仕様について

『金城温古録 第十之冊 御天守之編二 御天守部』 「御天守」の項に、大天守五階外部長押の六葉についての記述がある。

「第五重の外ヶ輪狭間の窓の上へ下タ/長押を通し惣地壁と共に白土にて塗籠め其面に赤/銅煮黒めのかなぐ六葉を打付る」

これより大天守五階外周の腰長押、内法長押に付けられていた六葉は赤銅製で煮黒目仕上げであったことがわかる。

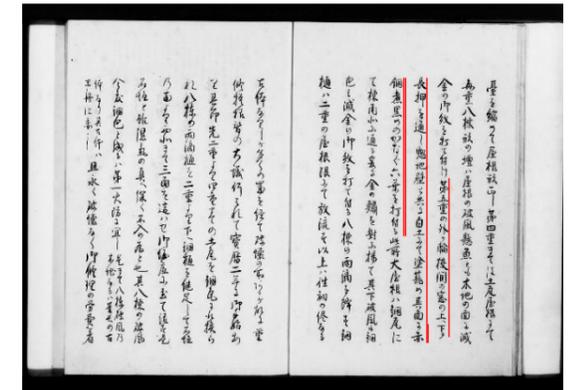
また『金城温古録 第十四之冊 御天守之編六 図彙部』 「小天守大体」にある「御飾御紋の事」の項で、小天守外部長押の六葉についての記述がある。

「一 懸魚の目 并長押かなぐ共に六葉形なり 但なげしかなぐは赤銅」

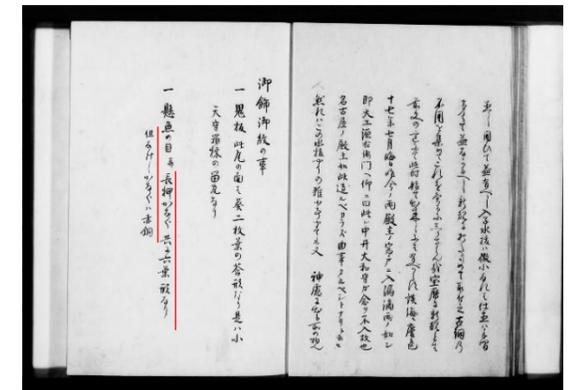
「赤銅」とだけあり、大天守のように「赤銅煮黒め」とは書かれていない。しかし、古くから工芸品等で赤銅を用いる場合は、煮色仕上げを行い、その際の青みがかった黒色や紫がかった黒色から「烏金」「紫金」とも呼ばれてきたため、小天守も黒系色であったと考えられる。(赤銅：銅に3~5%の金を加えた合金)

3-2 復元原案について

基本的に復元原案の寸法、仕上仕様を踏襲し復元案とする。



『金城温古録 第十之冊 御天守之編二 御天守部』 「御天守」の項(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)



『金城温古録 第十四之冊 御天守之編六 図彙部』 「小天守大体 御飾御紋の事」の項(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)

(特記無き限り 名古屋城総合事務所蔵)

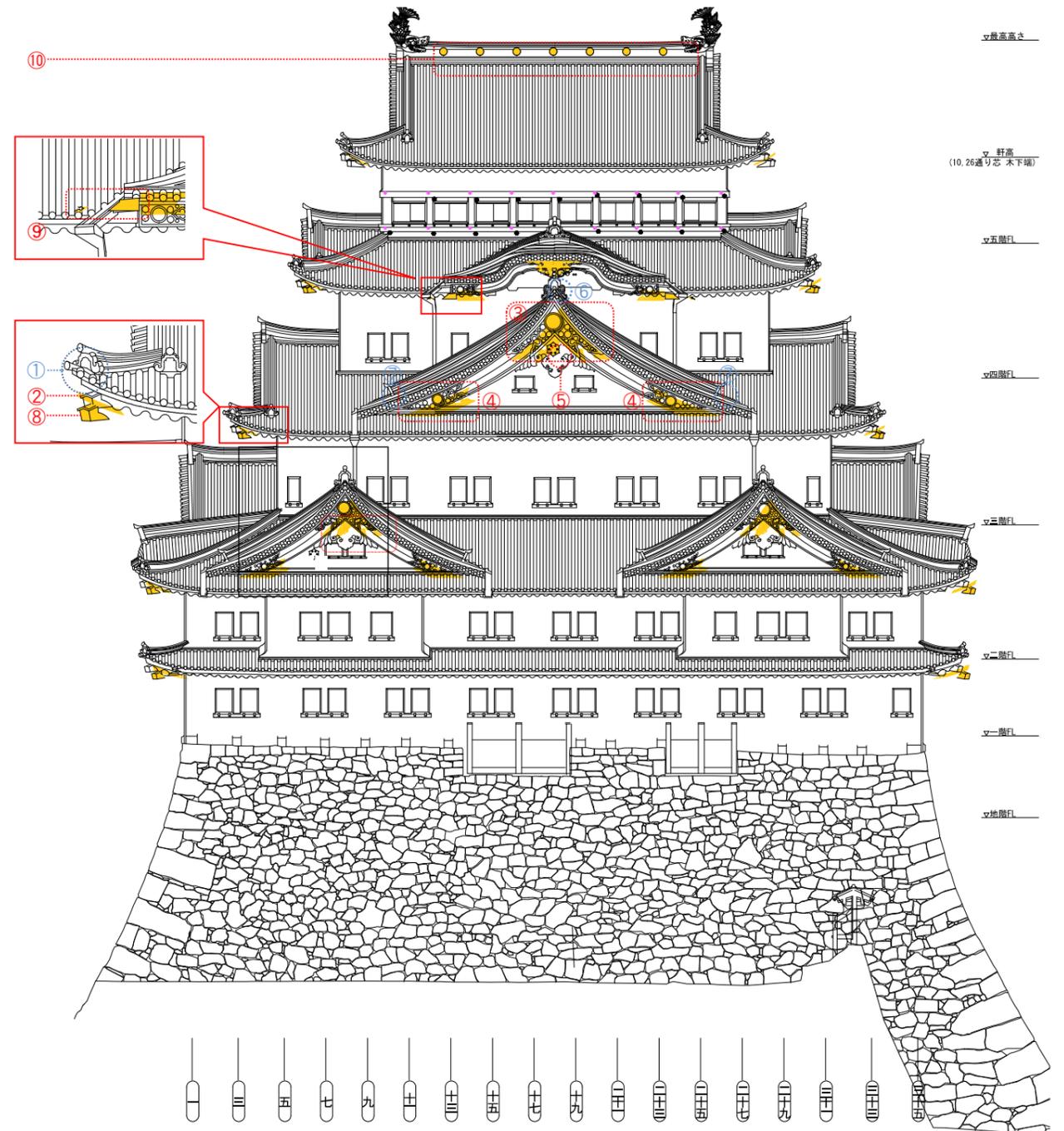
4. 外部飾金具について

ガラス乾板写真、昭和実測図から確認できる外部飾金具の一覧は下記の通り。

階	摘要、一カ所当たり個数	数量合計
初重	裏甲 隅八双	8
	隅木 箱金物	4
二重	隅棟 4カ所 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	4
	裏甲 隅八双	8
	唐破風際 八双	8
	東西千鳥破風:4カ所 破風板拵 八双、葵紋	4
	破風板尻 八双、葵紋	8
	懸魚六葉	4
	棟 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	4
	降棟 鬼板鏡葵紋2、鳥衾葵紋2	8
	南北千鳥破風:2カ所 破風板拵 八双、葵紋	2
	破風板尻 八双、葵紋	4
	懸魚六葉	2
	棟 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	2
	降棟 鬼板鏡葵紋2、鳥衾葵紋2	4
	南北唐破風 :4カ所 破風板拵 八双、葵紋	4
破風板尻 八双、葵紋	8	
懸魚葵紋	4	
棟 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	4	
隅木 箱金物	4	
三重	隅棟 4カ所 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1 <span style="color:red">右図①</span>	4
	裏甲 隅八双 <span style="color:red">右図②</span>	8
	東西千鳥破風:2カ所 破風板拵 八双、葵紋 <span style="color:red">右図③</span>	2
	破風板尻 八双、葵紋 <span style="color:red">右図④</span>	4
	懸魚六葉 <span style="color:red">右図⑤</span>	2
	棟 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1 <span style="color:red">⑥</span>	2
	降棟 鬼板鏡葵紋2、鳥衾葵紋2 <span style="color:red">⑦</span>	4
	南北千鳥破風:4カ所 破風板拵 八双、葵紋	4
	破風板尻 八双、葵紋	8
	懸魚六葉	4
棟 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	4	
降棟 鬼板鏡葵紋2、鳥衾葵紋2	8	
隅木 箱金物 <span style="color:red">右図⑧</span>	4	

階	摘要、一カ所当たり個数	数量合計
四重	隅棟 4カ所 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	4
	裏甲 隅八双	8
	唐破風際 八双 <span style="color:red">右図⑨</span>	4
	東西千鳥破風:2カ所 破風板拵 八双、葵紋	2
	破風板尻 八双、葵紋	4
	懸魚六葉	2
	棟 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	2
	降棟 鬼板鏡葵紋2、鳥衾葵紋2	4
	南北唐破風 :2カ所 破風板拵 八双、葵紋	2
	破風板尻 八双、葵紋	4
懸魚葵紋	2	
棟 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	2	
隅木 箱金物	4	
五重	隅棟 4カ所 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	4
	降棟 4カ所 鬼板鏡葵紋1、鳥衾葵紋1	4
	裏甲 隅八双	8
	南北破風 :2カ所 破風板拵 八双、葵紋	2
	破風板尻 八双、葵紋	2
	懸魚六葉	4
隅木 箱金物	2	
五階	大棟 葵紋 <span style="color:red">右図⑩</span>	14
	外壁腰長押 六葉	28
外壁内法長押 六葉	32	

階	摘要、一カ所当たり個数	数量合計
初重	南北千鳥破風:2カ所 懸魚六葉	2
二重	東西破風 :2カ所 懸魚六葉	2
二階	外壁腰長押 六葉	28
	外壁内法長押 六葉	32



大天守東側立面図

4. 外部飾金具

4-1 復元原案について

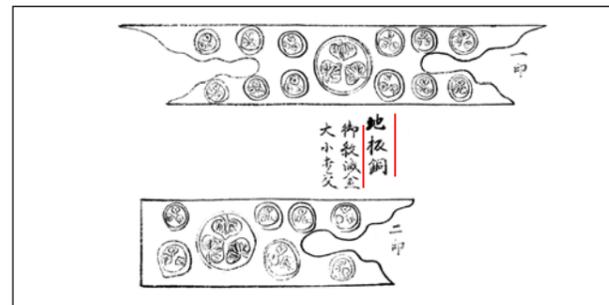
(1) 史料よりわかること

① 破風の飾金具

・ガラス乾板写真、宝暦修理関連史料、『金城温古録』より、破風板、懸魚に銅板が張られ、その上から減金が施された銅板つ、まり金色の飾金具が設えられていたことがわかる。

・ガラス乾板写真、昭和実測図より、八双金具に大小数々の三つ葉葵紋が設えられていたことがわかるが、その数に相異がある箇所もある。数についてはガラス乾板写真に基づき、各々の葵紋の直径については昭和実測図を基準としながらガラス乾板を参照し微調を加えながら復元原案を作成する。

・破風板を包む銅板：八双金具端部が欠落し金具下の破風板包みの銅板が現れている。

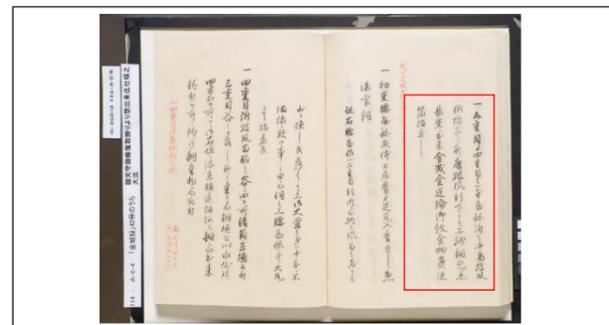


『金城温古録』



一、唐破風・千鳥破風共二十ヶ所御金物放し、下地直、地板新二打、銅板懸継包、懸魚鱗共銅二而包、黒ちやん塗、御金物磨下足仕足不残めつき箔差直打

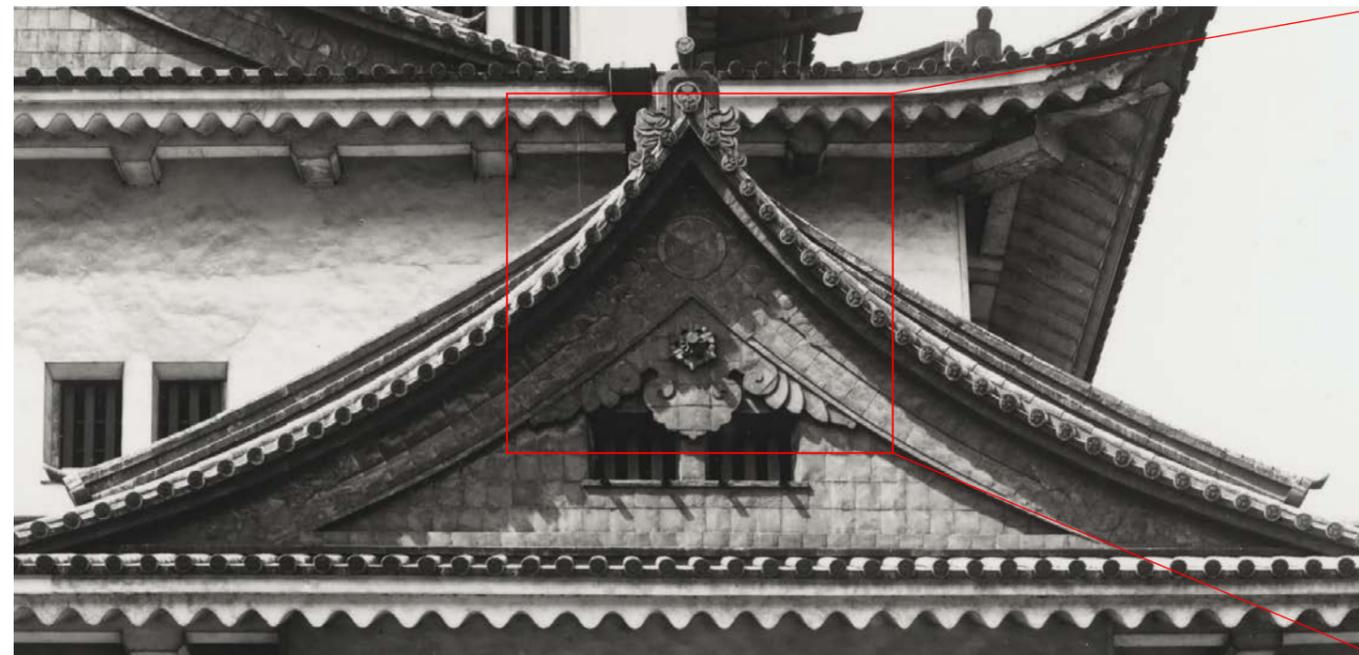
『国秘録 御天守御修復』  
「御天守御修復次第御用之輩姓名掛札之留」(\*1)



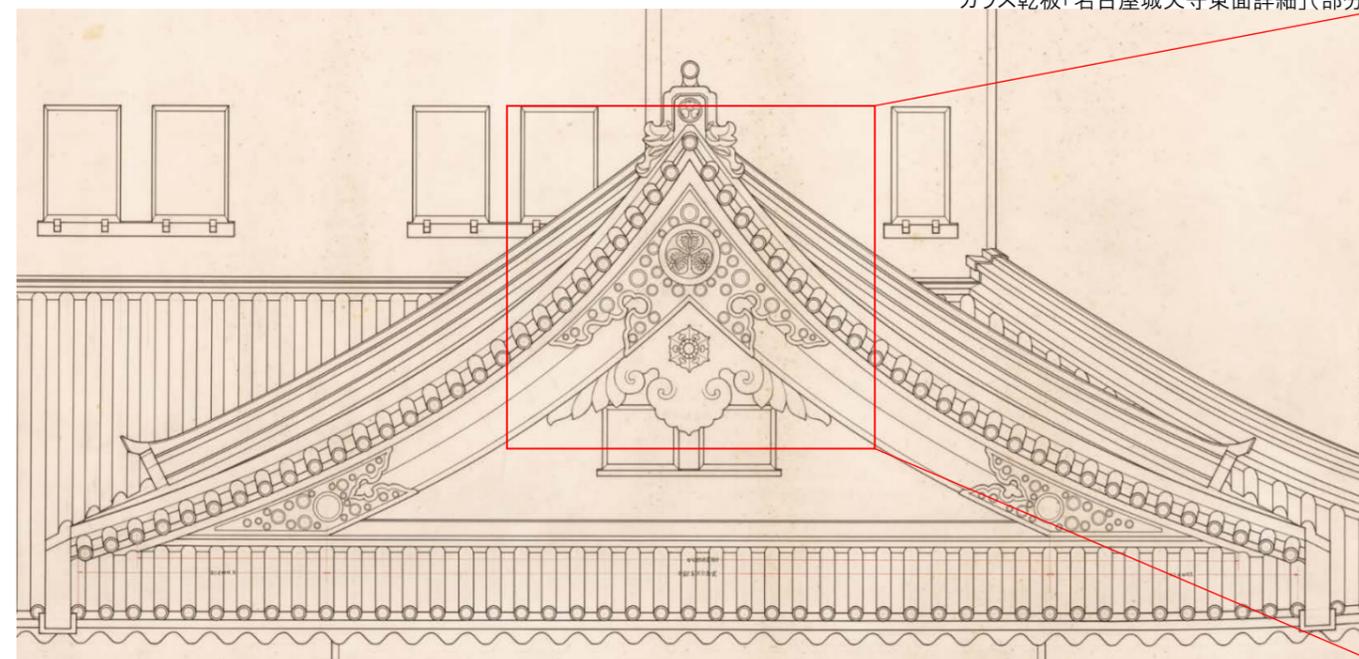
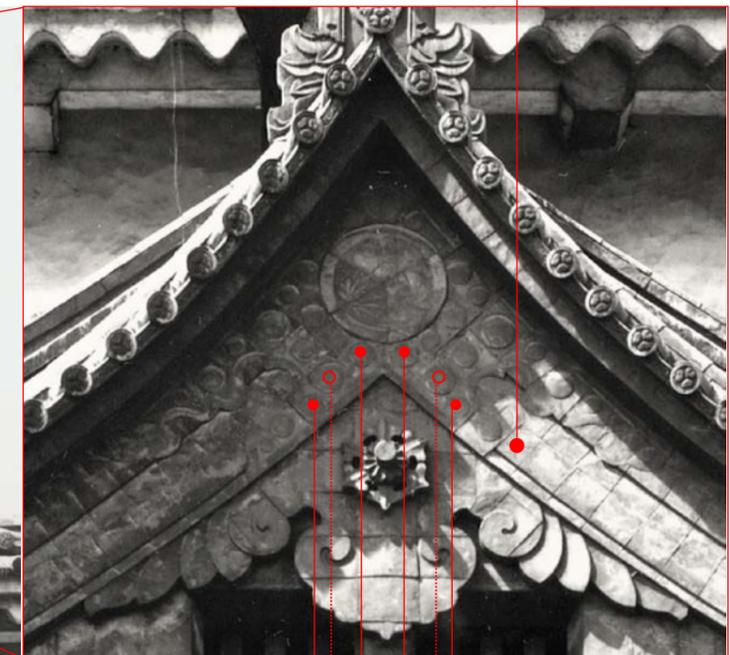
一五重目方四重目迄、本屋ね附共、千鳥破風、狐格子之所、唐破風軒下とも不残銅色黒長塗二出来、金減金逆輪御紋金物煮洗箔指直し

『金城録付属天守閣図面  
御天守御修復取掛り沿惣出来迄仕様之大法』(\*2)

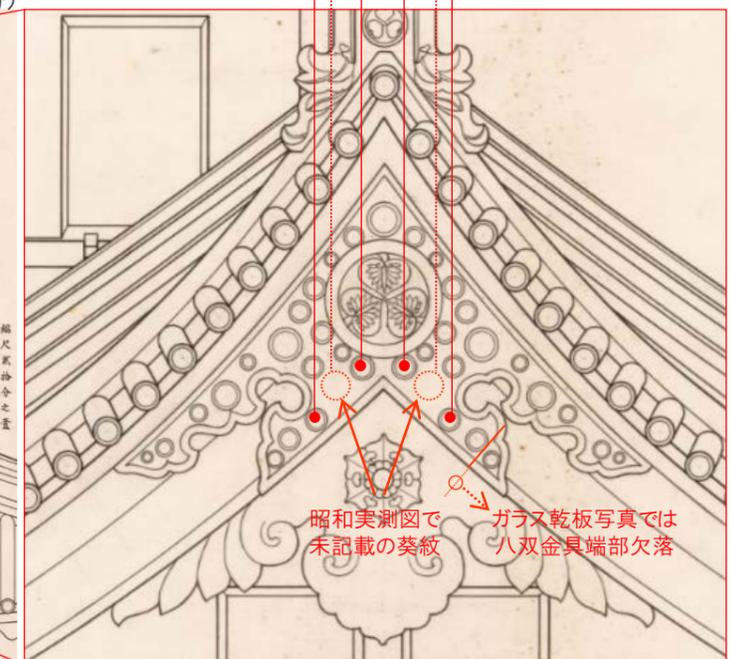
(\*1)(\*2) 出典：麓和善・加藤由香「名古屋城大天守宝暦大修理における各部修理について」『日本建築学会計画系論文集 第75巻 第635号』2010年7月



ガラス乾板「名古屋城天守東面詳細」(部分)



昭和実測図「名古屋城天守二階東側千鳥破風姿詳細図」(部分)



昭和実測図で未記載の葵紋  
ガラス乾板写真では八双金具端部欠落

八双金具：葵紋数の検証例

(特記無き限り 名古屋城総合事務所蔵)

4. 外部飾金具

4-1 復元原案について

(1) 史料よりわかることから

② 破風の鋳金具の仕様について

・名古屋城総合事務所所蔵の焼損遺物より右のことがわかる。

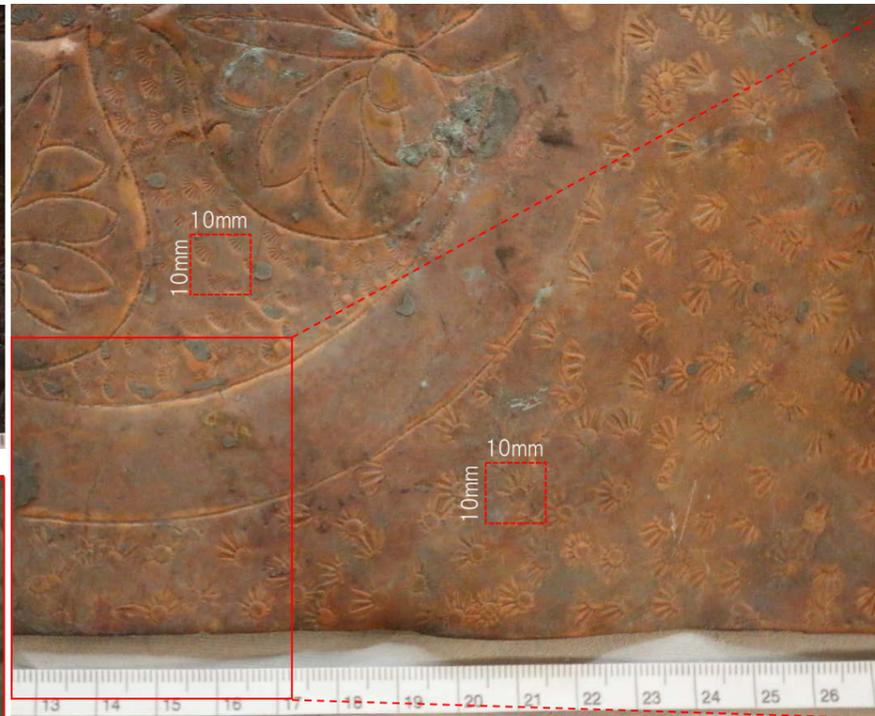
- ・葵紋を打出し、葉脈部は蹴り彫り。
- ・葵紋周辺の地の紋様には菊石目。
- ・葵紋内側にも同じく菊石目地の紋様がある。葵紋周辺より細かい菊石目。
- ・板厚さは0.8~0.9mm程度。
- ・ガラス乾板写真からも、八双金具は分割されて作られていることがわかるが、分割した板の中で葵紋を打ち出している場合と、別に作った葵紋を打ち付けている場合がある。



焼損遺物1



焼損遺物1(部分)



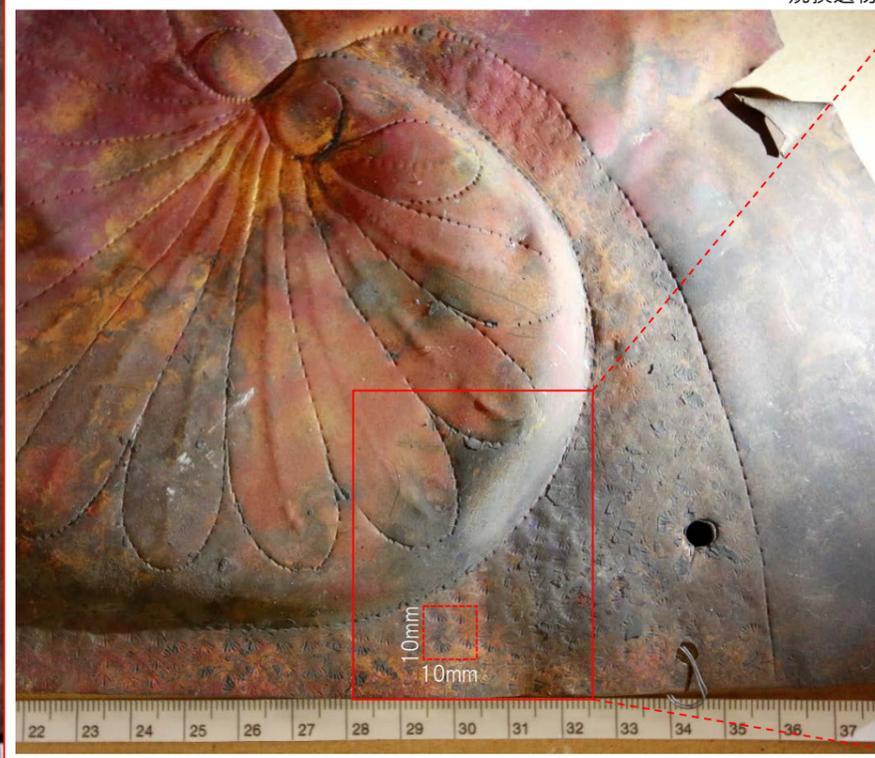
焼損遺物2



焼損遺物2: 部拡大



焼損遺物1: 部拡大



焼損遺物3



焼損遺物3: 部拡大  
(この項の焼損遺物: 全て名古屋城総合事務所 蔵)

4. 外部飾金具

4-1 復元原案について

(1) 史料よりわかること

③ 大棟の葵紋

ガラス乾板写真、『金城温古録』、『国秘録 御天守御修復一』より五階大棟には片面7個、計14個の葵紋の飾金具が付いていたことがわかる。

・直径

『国秘録 御天守御修復一』では一尺二寸五分、『金城温古録 御天守編之六 図彙部』では一尺四寸と記されており、実際に寸法に、これぐらいのバラツキがあったと考えられる。

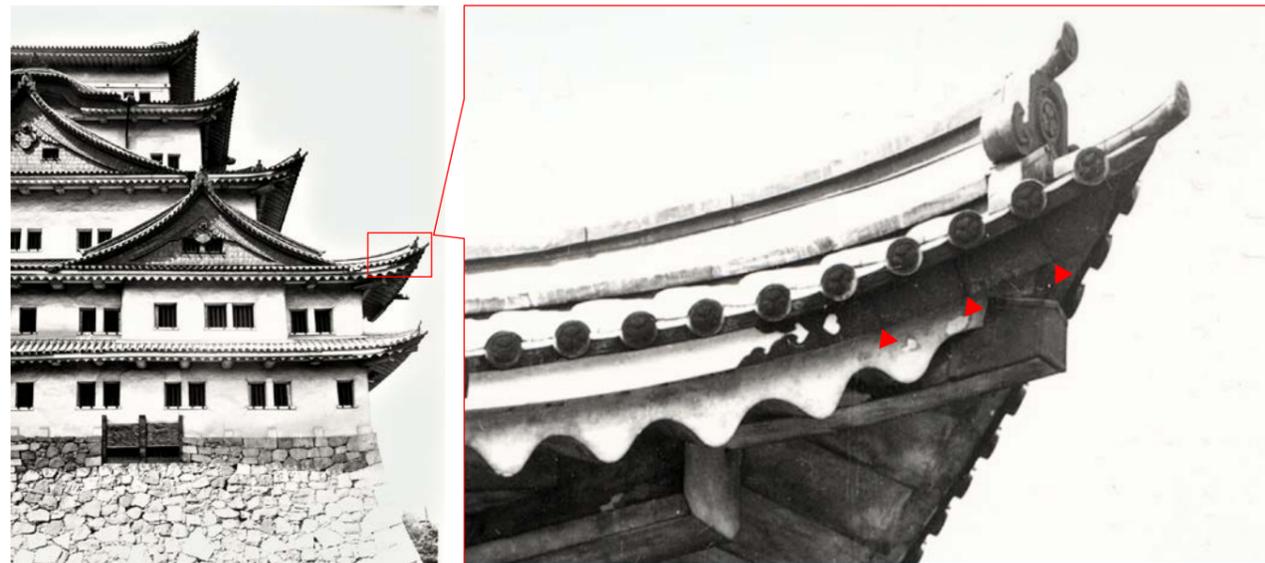
昭和実測図に、この御紋は記述されていない。昭和実測図に大棟の断面寸法は記載されているため、今後、ガラス乾板写真での大棟と御紋の見え方から寸法の検証を進め直径を定める。

・仕上仕様

『金城温古録 御天守編之四』「箱棟の御紋」の項に「御天守箱棟に金御紋一方に七個づゝ付申候」、『国秘録 御天守御修復一』に「箱棟両平御紋十四差渡一尺二寸五分めつき煮洗色付直し地板漆入鋸釘取付」とあることから、金色であったことがわかる。

④ 裏甲の八双金具、隅木の箱金物

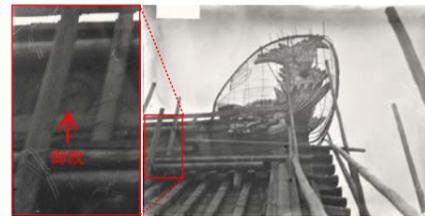
- ・裏甲の八双金具、隅木の箱金物の仕上仕様について記された史料は確認できていない。
- ・ガラス乾板写真より、例えば二重の八双金具は4分割されていることが確認できる。
- ・奈文研所蔵摺本では、八双金具周囲の打出しや地の紋様は確認できない。



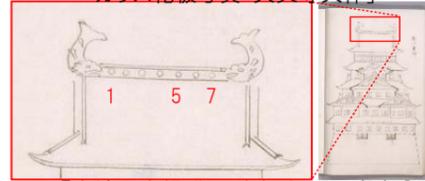
ガラス乾板「名古屋城天守東面詳細」

4-2 復元案について

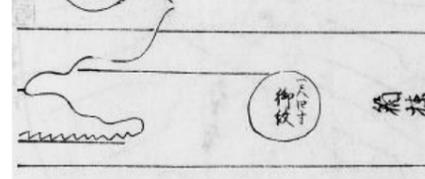
復元原案を踏襲した金メッキとし、伝統工法の中でも、耐候性を踏まえた漆箔押しとする。復元原案で確認できなかった、破風板飾金具の菊石目部分の仕上げ、裏甲八双金具と隅木の箱金具も現時点では漆箔押しと考えることとするが、引き続き検証を行っていく。



ガラス乾板写真「大天守大体」



『金城温古録 御天守編之六 図彙部』  
「大天守大体」(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)



『金城温古録 御天守編之六 図彙部』  
「真木真鉄取付方之図」(部分)  
(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)

5. 鬼板

5-1 復元原案について

(1) 史料よりわかること

① 二重～四重の鬼板

宝暦関連史料より、二重～四重の鬼板60個（個数は昭和実測図と一致）が唐金すなわち青銅の铸件で設えられたことがわかる。

「一 四重目より二重目迄御屋根従前、通りの姿/土瓦取り払い、下地野裏板迄取り放ち/新たに土居桁置き、榑打ち、破風の分/反形打ち、何れも古裏板下熨斗/板に過半用い、上熨斗板、棧木、箱/棟共に新たに取り付け、銅軒唐草御紋/鼻瓦取り付け、平銅重ね葺き、丸打懸け/継ぎ、隠釘打ち葺き直し、大小鬼板六十/唐金にて铸件に拵え取り付け惣黒ちやん塗り

(\*『国秘録 御天守御修復』御天守御修復次第井御用之輩姓名掛札之留)



(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)

「一 同御屋ね銅葺平之分 巾八寸長三尺 重子五寸丸之/分 巾八寸 長巻尺五寸 下の方ハ内江 上の方ハ外江巻寸ツ折返し 右折返し上の方三本宛鉄銅鋸交打 其/次之丸掛継二して 所々右之通釘之頭不顕様に/葺上 軒平唐草 軒丸御紋いつれも銅板打出し/鬼板御紋付 同鱈 鳥伏間共唐銅二而铸件取付/土居のし下銅釘打不残黒長塗ニ出来

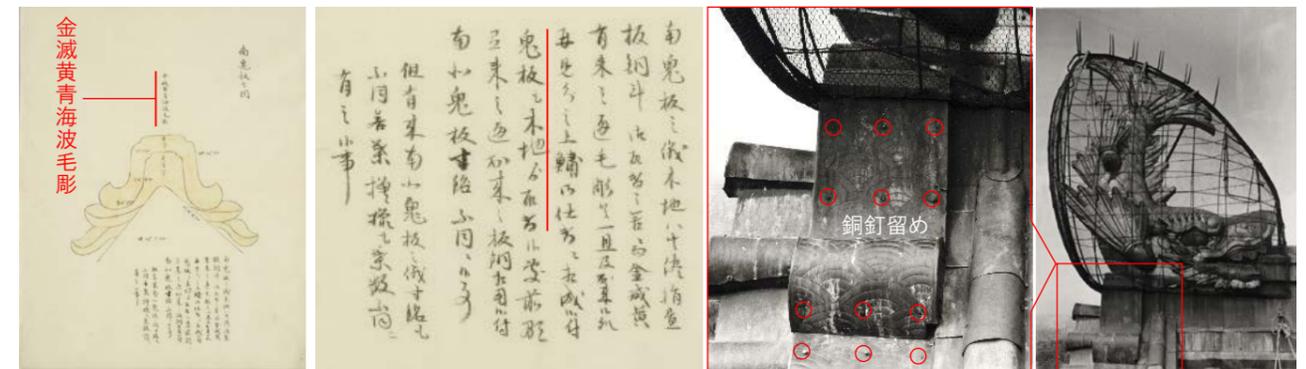
(\*『金城録付属天守閣図面 御天守御修復取掛かり沿惣出来仕様之大法』)

(\*出典: 麓和善・加藤由香「名古屋城大天守宝暦大修理における各部修理について」『日本建築学会計画系論文集 第75巻 第635号』2010年7月)

② 五重大棟の鬼板

『国秘録 御天守御修復一』享保17年(1732)の修理記録に「鯨下鬼板 同ひれ共仕直し銅板二而/包釘打」とあり銅板で包み釘で打って作ったことがわかる。また「御天守鱈木地仕口寸尺之図」(文政10年)により、この時の修理で大棟の鬼板は「木地より取替候」とある。これらより五階の鬼板は木下地を銅板を包んで作られていたことがわかる。ガラス乾板写真でも銅釘で留めてあることを確認できる。

表面の仕上げに関して「金滅黄青海波毛彫」という書き込みがある他、鬼板の図にも鯨と同じ黄色が塗られている。つまり、縁の部分には青海波が毛彫りされ、全体が金メッキされていたことがわかる。鬼板の青海波はガラス乾板写真でも確認できる。



「御天守鱈木地仕口寸尺之図」文政10年(1827)

ガラス乾板写真「名古屋城天守(戦災焼失)南方金鯨」

③ 五重の隅棟及び降棟の鬼板

①②の史料では五重の隅棟、降棟の鬼板について記されていない。①で記された箇所数に五重の鬼板は含まれないことから、五重の隅棟、降棟の鬼板は大棟と同様木型を銅板で包んだものと思われる。

5-2 復元案について

復元案は復元原案を踏襲した仕様とする。五重大棟の鬼板は漆箔押しとし、五重の隅棟及び降棟の鬼板は木型、銅板包み、青海波毛彫りとする。

(特記無き限り 名古屋城総合事務所蔵)